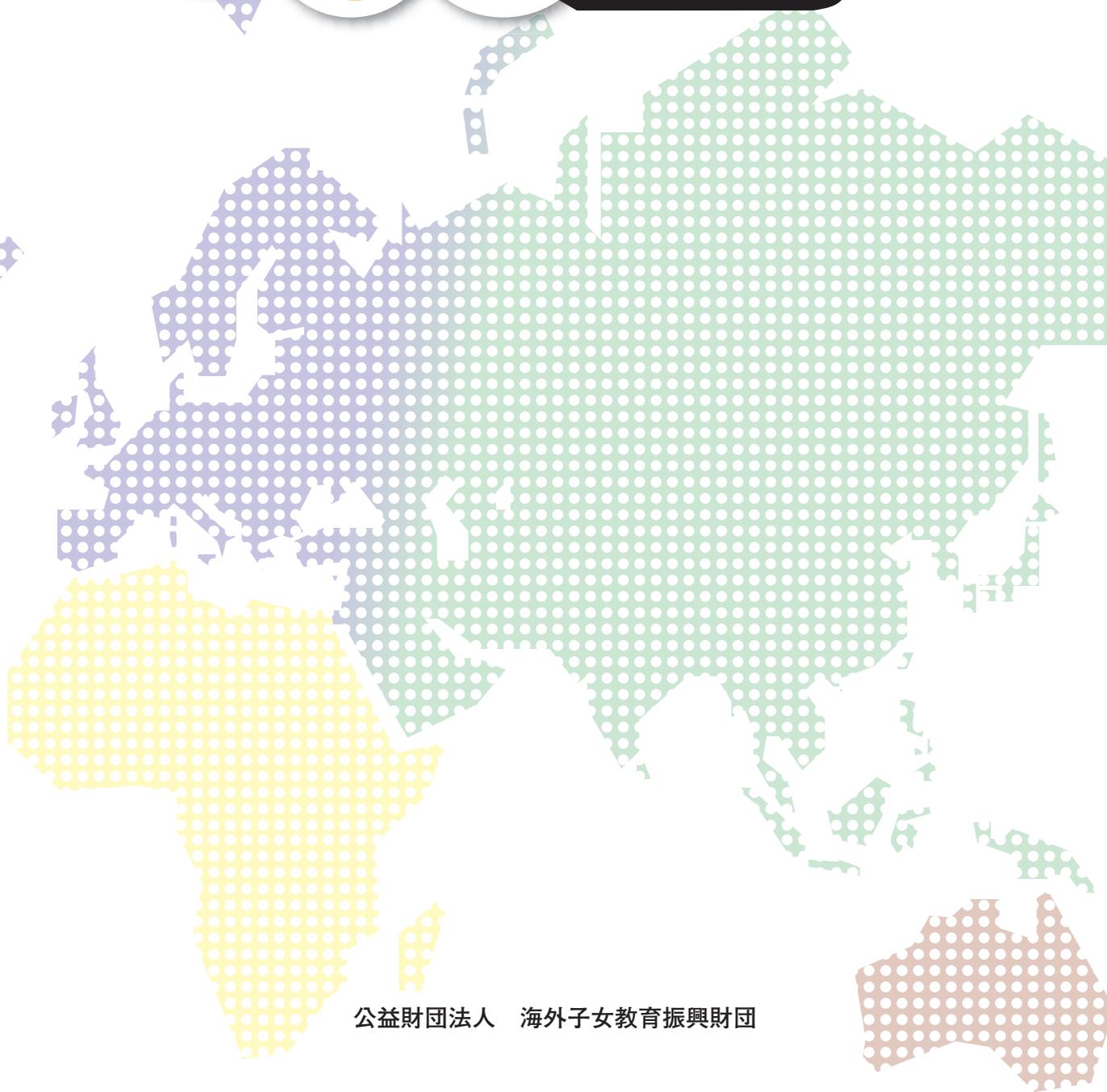


2018年度

文部科学省委託事業
「在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業」(略称:AG5)

エー
A ジー
G ファイブ
5 だより 集



公益財団法人 海外子女教育振興財団

本冊子について

弊財団は、1971年に外務省および文部省（現 文部科学省）の許可を受け、海外で経済活動を展開している企業・団体によって設立されて以来、海外赴任者・帰任者のための教育相談・情報提供や、日本人学校・補習授業校への財政上・教育上の援助等をはじめ、政府の行う諸施策および維持会員の要望に相呼応して幅広い事業を展開・実施してまいりました。

一方、日本政府においても、近年急速に発展してきた経済社会のグローバル化に対応する人材育成を喫緊の課題と捉えており、文部科学省では在外教育施設をグローバル人材育成拠点と位置づけて、大学・民間研究団体等の研修者と連携して評価・検証を行い、より高度なグローバル人材の育成を見据えた先進的なプログラムの開発・推進を図ることを打ち出しました。

そしてこのたび弊財団は文部科学省からの委託を受け、それらの指導体制、指導・評価方法、ICT教材の活用等の実証研究を担う「在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業」（略称：AG5）（委員長：佐藤郡衛・明治大学特任教授／前 目白大学学長／元 東京学芸大学副学長）を実施する運びとなりました。

その成果発信の一環として弊財団で発行している月刊『海外子女教育』で2017年度は「日本人学校・補習授業校タマテバコ」という名称で連載し、2018年度からは「AG5だより」と名称を変え現在まで連載を続けております。連載では各テーマの研究の進捗状況や取り組みを紹介しています。本冊子では2018年度のものをまとめました。

弊財団では引き続き、「日本人学校におけるグローバル能力育成のためのプログラム開発」や「日本人学校など在外教育施設におけるバイリンガル・バイカルチュラル人材育成のためのプログラム開発」、「南米日本人コミュニティにおける日本語教育・日本型教育・日本文化の発信・普及のためのプログラム開発」などに向けて本事業を推進し、これを通じて新たに開発したプログラムや提言を国内外の教育施設へ周知・普及することにより、高度グローバル人材育成に貢献することを目指してまいり所存でございます。今後とも皆様のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

2021年3月

公益財団法人 海外子女教育振興財団
AG5事務局

AG5 だよ

日本人学校・
補習授業校を
応援します！



在外教育施設の挑戦を支える—AG5プロジェクトの成果—

AG5運営指導委員会委員長・明治大学特任教授 佐藤 郡衛

文部科学省の委託事業である「在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業」(通称、AG5=Advanced Global Five プロジェクト)を開始して1年が経過しようとしています。これまでの取り組みについては、本誌でも「日本人学校・補習授業校タマテバコ」の欄で紹介してきましたが、新年度が始まるにあたり、改めてこの1年間の取り組みについて紹介したいと思います。なお、「日本人学校・補習授業校タマテバコ」は今年度から「AG5だよ」に名まえを変え、トップページに引っ越します。1ページ増えて、さらに内容も充実させていきますので、引き続きご愛読いただきますようよろしくお願い申し上げます。

「AG5プロジェクト」の背景

在外教育施設の新しい役割として、グローバル人材育成が重要な柱に位置づけられるようになってきました。

国が掲げた「日本再興戦略2016」では、「海外の子供たちが質の高い教育を受けられるよう在外教育施設における教育環境機能の一層の強化」策を打ち出しています。総務省では「どのようなグローバル人材育成教育を実施していくか」を明確にするよう求めていますし、直接の担当部署である文部科学省では「在外教育施設グローバル人材育成強化戦略」を打ち出し、在外教育施設での新たな取り組みを進めようとしています。「AG5プロジェクト」はこうした政策的な課題に応えようとするものです。

グローバル人材とは

まず、「グローバル人材」について明確にしておきましょう。ここでは次のようにとらえています。①広い視野、論理的思考力、適応力、自己表現力などのグローバル型能力と英語力を兼ね備えた人材、②高度の日本語能力・外国語能力を持ち、二つの文化と社会を理解し二つの国の架け橋になる人材、③世界各国の日本

人コミュニティにおけるリーダーとなるグローバルな人材、④日本の社会・文化、日本語を理解し、日本を支援する親日的な人材。以上のように想定しています。

こうした人材を在外教育施設で育成するための取り組みを支援することが今回のねらいです。まずは「広い視野」「論理的思考力」「適応力」「自己表現力」などのグローバル型能力と英語力を伸ばすための取り組みを支援することです。国際バカロレア(IB)に準拠した実践を行っている日本人学校の支援を開始しました。つぎに、日本人学校や補習授業校において二言語能力と二つの文化や社会を理解する能力を育成するための取り組みへの支援です。日本人学校、補習授業校ともに最近では国際結婚家庭の子供が多く就学しています。こうした子供たちの言語能力の特性を積極的に活かし、二言語能力の育成を図る取り組みを支援します。さらに、在外教育施設を日本文化発信の拠点として位置づけ、現地日本人コミュニティのリーダーや親日的人材を育成するための支援を開始しました。また、学校図書館を活用し日本文化の発信や日本語の学習の場を提供していきます。そして最後に、グローバル人材育成のためにすべての

在外教育施設が必要としている教員の指導力向上のための取り組みです。在外教育施設での質の高い教育を実現し、グローバル人材を育成していくには教員の指導力の向上が不可欠です。ここでは教員の研修のための支援策を打ち出しました。

在外教育施設でこうした新しい取り組みを行っていくことは容易ではありません。今までにない取り組みのためどう取り組んだらよいのか、また実践するための人材、財源などリソースが限られているためです。

このプロジェクトをスタートするにあたり、日本国内から一方的に新しいことをやってほしいといった、いわば「下ろす」ような取り組みでは対応できないことが分かっていました。そこで、私たちが考える支援策と在外教育施設のこれまでの実績を考慮して、実現可能なところをお願いをして共同で取り組むことにしました。昨年度は、直接学校にうかがい、関係者と協議して協力体制を築き、取り組みを開始しました。

グローバル型能力育成のための教育支援

—香港日本人学校香港校小学部の取り組み—

香港日本人学校香港校小学部では、平成二十八年四月から四年生にグロ

「バルクラス」を開設しました。算数と理科を英語で行い、また学校独自の「グローバルスタディーズ」(世界的な課題について学期に一つのトピックで行う探究型の学習)という授業で問題解決力、論理的思考力、表現力などの育成を目指す点に特徴があります。香港日本人学校大埔校には国際バカロレアの小学生用のプログラム(PYP)を行う国際クラスがありますが、香港校小学部ではあくまでも日本の学校教育を前提とし、IBに準拠した教育を行っています。昨年度は、英語による算数と理科の授業の進め方や「グローバルスタディーズ」の内容や方法等について日本から講師を招聘して研修を行いました。また、このクラスを担当する先生の日本国内での研修も実施しました。日本で国際教育の先進的な実践を行っている東京学芸大学附属大泉小学校、東京学芸大学附属国際中等教育学校、ぐんま国際アカデミー初等部での授業参観や先生方との話し合いが持たれました。

今後、グローバルクラスの学習成果について、子供たちが作成した成果物や活動の様子が分かる写真やVTR等をもとに検証を行いますし、一年間で子供たちの英語力がどの程度伸びたかを具体的に測定していきます。

ます。これまでの学習の成果については、AG5のポータルサイト(www.ag5.jp)をご覧ください。

二つの言語能力を向上させるための支援

— 台北、台中、高雄日本人学校での取り組み —

台湾の日本人学校には国際結婚家庭の子供が多く在籍しています。こうした子供たちの中国語能力を活かしつつ、日本語能力を育むことで、二言語能力を持つ人材として育成する取り組みです。そのためには、科学学習のための日本語の力をしっかりと伸ばしていくことが必要です。台湾の三つの日本人学校には、同じような環境にある子供がいるため共通の課題を抱えていますので、ICTを活用すれば三校間で教員の研修や実践の共有化を図ることもできます。

昨年度は、台北日本人学校が中心になってこのプロジェクトを進め、その推進役としてコーディネーターの先生を配置しました。台北日本人学校では、日本語能力が不足している子供たちのために日本語クラスを設けていますが、そこに通う子供の日本語力の測定と日本語指導カリキュラムの開発を行いました。教科の学習に役立つ日本語力を高めていく

ために、生活科をベースにした日本語教育に関わるカリキュラムです。今年度は小学部一、二年生の日本語の授業でどのような内容を扱い、どのような支援策が有効かについて実践を通して検証していくことにしています。

台北、台中、高雄の各日本人学校の担当の先生方が台北日本人学校で共同の研修、さらに日本国内での研修も行いました。日系ブラジル人を中心に多くの外国人の子供たちが就学し、早くからこうした児童生徒への教育に取り組んでいる静岡県浜松市と菊川市の小・中学校を訪問し、授業の進め方、教材開発、学校全体での取り組み、地域との連携などについて意見交換を行いました。その他、高雄日本人学校は、現地の中正國民小學の校舎に入っており、日本語と中国語の授業を相互に行っていますが、こうした言語教育についても今後注目していきたいと思っています。

英語力と日本語力の向上を目指すための支援

— ダラス補習授業校の取り組み —

補習授業校の取り組みを支援するにあたり、まず補習授業校とそこに通う子供たちに対してアンケート調査を行いました。対象とした補習授

業校は十九校。学校や子供の実態把握、教育を進めていく上でどんな支援が必要か等の調査です。また、補習授業校に通う子供を対象に「学習状況調査」も実施し、約三八〇人から回答を得ることができました。詳細についてはAG5のポータルサイトを参照してください。

この一連の調査の結果、高い英語力を保持しているも、科学学習に十分対応できるだけの日本語力がない子供がおり、そうした子供たちの日本語力をつけること、そのためには日本の文化や社会の理解力を高める必要があることが改めて確認できました。そこで、ダラス補習授業校に協力をお願いし、活動ベースで、しかも教科と関連付けた日本語指導のプログラム開発を行うことになりました。「発見! わたしたちのテキサス、わたしたちの都道府県」という単元を開発し、子供たちが日本語で考え、調べ、そして発表するという協同の学習への支援を行っています。このプログラム開発の核となるコーディネーター役の先生が配置され、積極的な取り組みが行われています。補習授業校の先生方の日本国内での研修も実施し、東京学芸大学附属国際中等教育学校や啓明学園などを訪問し、研修を受けました。そ

の他、この单元をもとに、ワシントンDC、クリーブランド、コロロンス(OH)、セントルイス、オースチンの各補習授業校と共同で実践を行うことも探っているところです。

日本型教育・日本語教育の発信の取り組み

—アスンシオン日本人学校の取り組み—

パラグアイの日系人は、パラグアイの発展に大きく寄与してきましたが、若い世代も日本との架け橋として活躍できるようにしていくことが課題です。そのために日本人学校が一定の役割を果たしていくことが期待されます。そこで、日系人と生活拠点であるコミュニティに対して、日本語学習をはじめとする日本型教育や日本文化を発信する取り組みをアスンシオン日本人学校で行うことにしました。日本型教育や日本語教育を行うために、アスンシオン日本人学校がアスンシオン日本語学校、日本パラグアイ学院に対して支援するという取り組みです。昨年度は、日本人学校と日本語学校の合同研修会が開催されました。両校の話合いを通して、日本語学校では国語科の指導に関して多くの課題を抱えていることが分かってきました。そこで、日本人学校の教員が日本語学校

に出向き、共同して授業に臨むという取り組みを開始しました。

この他、日系人としてのアイデンティティ形成のための移住関連教材の開発支援も行います。開発の参考とするため、日本国内で研修を行い、横浜にあるJICA海外移住資料館等を訪問しました。今年度以降は日本人学校で使用する副読本とも関連付けて開発を行っていくことになっています。

日本文化等の発信の拠点形成の支援

—西大和学園カリフォルニア校の取り組み—

これは、学校図書館を日本文化や日本語の学習の場にし、そこで多様な活動を行うことで、結果として親日的な人材を育成することがねらいです。西大和学園カリフォルニア校の図書館で日本文化発信のための取り組みや図書館を現地の人に開放し、そこで交流活動を行っていくという取り組みです。昨年度は、治安上の問題もあり対象を交流校の子供や教員、そしてその保護者に限定し、図書館で「琴と舞踊の披露会」「お茶のお手前」「日本映画の上映会」等のイベントを開催し、あわせて関連する資料や図書を展示しています。多言語・多文化図書館を目指しており、

英語に翻訳されている日本の絵本などを整備し、平成三十年度には地域の人々に開放するとともに、子供への読み聞かせ等を行うことを計画しています。

教員の実践的指導力向上のための支援—上海日本人学校での取り組み—

上海日本人学校は全体の教員の約半数が学校採用教員で、中には初めて教職に就く人もいます。学校採用教員の指導力を向上させることが、学校全体の教育力の向上につながります。同校の協力を得て、教員の研修プログラムを開発し、提供するという取り組みを開始しました。

昨年度は、上海日本人学校の派遣教員と学校採用教員計一五二名にアンケートを実施し、どのような研修のニーズがあるかを把握しました。この結果を受けて、今年度に上海日本人学校に学校採用教員として採用されることになった先生方に二日間にわたり東京で事前研修を行いました。初日は、「学級経営・生活指導・危機管理」「授業構成」「基本的な授業の進め方」等に関する講義とワークショップを、二日目は授業実践に役立つように演習形式で授業づくりの研修を行いました。派遣前にとどのようなプログラムが適切か、効果的

かを把握する上で参考になるものとした。

この他、四月以降の自己研修で使うための「初任者研修指導資料」を作成しました。今年度はこの資料を全日本人学校に配付する予定です。また、就任後に継続的な研修ができるように、例えば「一学期終了時、夏期休業中、二学期、三学期と実践を進めていくなかで出てくる課題を解決できるような自己研修用のプログラム開発を行うことにしています。

今年度の取り組みに向けて

昨年度の各事業の取り組みの成果については、先述のAG5のポータルサイトをご覧ください。

今年度は、昨年度の取り組みを基本的には踏襲し発展させるとともに、新しい取り組みも視野に入れて進めていきます。そして、より「高度グローバル人材育成」という視点に焦点化していきたいと考えています。在外教育施設で高度グローバル人材をどう育成するかについて具体的な実践をもとにした提案をするよう注力していきます。

引き続き日本人学校や補習授業校の取り組みについて報告する予定です。ぜひご期待ください。

AG5 だよ

日本人学校・
補習授業校を
応援します！校長調査に基づいた補習授業校プログラム開発の方向性
—グローバル社会の次世代を育てるフロンティア—

AG5委員 奈良教育大学教育学部教授 渋谷 真樹

私たちAG5プロジェクトでは、将来グローバルな社会で役立つバイリンガル・バイカルチュラルな能力を育てるために、補習授業校における日本語能力向上のための総合的なプログラム開発に取り組んでいます。プログラム開発にあたって、まずは、補習授業校の現状や課題、ニーズをしっかりと踏まえる必要があります。そこで、私たちは補習授業校の校長にご協力いただき、教育の内容や方法、子どもや家庭、教員についてなど、57項目の質問にご回答いただきました。



二〇一七年七月号の本誌「タマテバコ」では、その調査結果の第一弾として、アメリカの補習授業校八校について報告しました。

その後、私たちは、アメリカの補習授業校七校を訪問し、校長・副校長、運営委員、教師、保護者、児童生徒の皆様からお話を伺うことができました。その概要は、同年十一月号、十二月号の「タマテバコ」でお伝えしています。他に、帰国した校長からお話を伺う機会も得ました。

こうして私たちは、北米十六校、ヨーロッパ二校、アジア一校の計十九校の補習授業校からご回答いただくことができました。

今回は、これらの調査を踏まえてみてきた、今後のAG5の補習授業校プログラム開発の方向性についてお伝えしたいと思います。

なお今回の報告は、おもにアメリカの中・大規模の補習授業校を対象としています。アメリカ以外の地域や小規模校には、また別の現状や課題があるでしょうから、今後の課題にしていきたいと思います。

補習授業校の多様化への対応

すでに二〇一七年七月号の「タマテバコ」でお伝えしたことです、

今回の調査で再確認されたことは、補習授業校には、数年で帰国する予定の子どもから、現地で生まれ育った子どもまで、さまざまな子どもたちが集まっているということです。概して、帰国予定がある家庭は、学齢相当の日本語力を前提にして、学力の向上を望んでいます。一方、帰国予定のない家庭では、日本語に親しむ、会話力を中心に日本語力を伸ばすことを求めています。

けれども、駐在か永住かだけで一概に語ることはできません。今回の訪問調査では、国際結婚家庭や永住家庭で、きわめて熱心に子どもの日本語教育をしている多くの家族に出会いました。また、帰国か永住かが不明な家庭が多いことにも留意が必要です。ひとつの国から別の国へと、海外での移動を繰り返す家庭もありますし、社命ではなく、家族自身の希望や都合で、住む国を決める家庭も増えています。

さらに、補習授業校ごとに児童生徒の多様化が異なっています。依然ほぼすべてが駐在家庭の子どもという補習授業校がある一方、永住家庭の子どもが過半数の学校もあります。このような実態を踏まえて、私たちAG5プロジェクトは、一律のプログラムを提示するのではなく、各

学校や学級の現状に合わせて教師が活用できるような、汎用性の高いプログラムを開発する必要があると考えています。現にこれまでもいくつかのモデル・カリキュラムや教案が示されてきたのですが、実態に合わずに、なかなか使われないうままになってしまいうことが少なくありませんでした。

ですから私たちは、たたき台にしてもらえるような使いやすい案を提示して、あとは子どものニーズを一番よくわかっている担任の先生に創意工夫していただける仕組みを作っていきたく考えています。

補習授業校という「サクラチユウ聖域」

今回の調査で確認されたことの二つ目は、当たり前のことかもしれませんが、やはり「補習授業校は必要とされている」ということです。塾でも通信教育でもなく、今はやりのインターネットでの家庭教師でもなく、補習授業校が必要とされているのです。日本語力を身に付けたり、教科の力を伸ばしたりすることだけに特化するならば、補習授業校よりも効率的な方法があるかもしれません。けれども、大切な土曜日にわざわざ遠くから子どもたちが補習授業

校に集まってくるのは、そこに同じような背景を持つ友だちがいて、まるで日本の学校のような空気が流れているからです。

補習授業校の利点については、各校から多くの意見が寄せられました。日本語力の保持や伸長、国語や算数などの教科力の向上といった項目も挙げられましたが、日本にルーツを持ちながら、海外で育っている子どもたち同士が学び合い、友情を深めることや、日本の文化や教育のスタイルを学習することも、補習授業校の大事な点として挙げられています。補習授業校は、圧倒的に現地の文化に囲まれた環境^{サウンズユア}下における、日本文化の保護区、聖域といえるかもしれません。

ですから補習授業校では入学式や卒業式で日本の式典のあり方を学んだり、運動会で日本の学校文化に触れたりすることも重要です。授業中にトイレに行くことについて、現地校では許されているけれども、補習授業校では、あえて日本の学校に準じた指導をしている、という回答もありました。

ある補習授業校では、夏休みの宿題として、「図書プロジェクト」と題して、日本語の本を読んで作者や主人公への手紙を書いたり、本の帯や

表紙を作ったりする活動を行っているそうです。海外ではなかなか手が伸びにくい、日本語の本に親しんでもらう工夫ですね。また、「漢字チャレンジ」や「都道府県名テスト」を行い、好成绩者に合格証を出して、覚えにくい知識を吸収するためのモチベーションを高めているそうです。

さきほど述べたように、補習授業校では、日本語力や将来設計の異なる子どもたちが学んでいます。ニーズに応じたクラスやカリキュラムを用意している補習授業校は少数です。このことは、個々の能力やニーズに応じて効率的な指導をすること以上に、補習授業校では、日本にながりを待つ子どもたちがいっしょに学ぶことを通して、日本の子どもたちと共通の経験を積むことを優先していることが背後にあるのでしよう。

日本の学校に合わせるための 試行錯誤

ですから、今回ご協力いただいた多くの補習授業校で、日本の学校と同様の知識を得るために、日本の教科書に沿って、日本人の先生がクラスで一斉に授業をしていることは、ある意味で子どもたちに日本の子どもたちと同様の経験をさせたいとい

う補習授業校に集う家庭のニーズに合ったことと言えます。

けれども、このことが教師や保護者、そしてなにより子どもたちにストレスを与えているという現実もあります。たくさん宿題や漢字テストに泣きべそをかく子ども、金曜日の夜が戦場と化してしまっている家庭は、例外ではなく、むしろ典型です。

そうした無理についていけない児童生徒や家庭は、卒業を待たずに補習授業校を去っていくという残念な事実は、あちこちで確認できます。「小学三年生と中学でやめる子どもが多い」という回答が複数ありました。

多い補習授業校では、毎年二割程度がやめていくそうです。途中でやめる理由としては、現地校での学習や、スポーツなどの学校外活動が忙しいこと、学費や親の負担といった家庭の事情もありますが、多くの補習授業校が異口同音に挙げたのが、日本語力や学力がついていけないということでした。

週にたった一回しかない補習授業校で、日本の学校とまったく同じカリキュラムをこなすことが不可能なことは、みんな承知しています。今回の調査では、「日本国内の授業内容を一〇〇とすれば、補習授業校の

授業時間数でできることはいくらからいとお考えですか？」という意地悪な質問を、あえてさせていただきました。八〇パーセントという回答もあったものの、「二〇パーセント（基礎基本の部分）」、「日本よりはるかに下」という回答もありました。

補習授業校のよさを生かした 学びの提案

そこで私たちAG5プロジェクトは、海外での週末だけの授業で日本の学校と同じことをするという不可能に挑むよりも、むしろ補習授業校だからこそできるグローバルな学びへと転換していきたいと考えています。

多くの補習授業校から、「自校の生徒こそグローバル人材（の予備軍）である」とか、「自校はグローバル人材育成の最先端にいる」など、グローバル人材育成に結び付けた声をいただきました。「補習授業校の子どもたちは国際性や国際感覚に優れ、日本の国際化を進めていくうえで推進役になる『国家の宝』なので、国民に補習授業校の存在価値を広く知らしめ、財政支援を厚くすべきだ」という意見や、「複数文化での育成によって、科学的思考ができやすく、マイノリティの立場が理解できる」

という回答もありました。作文発表会や意見文発表会を行って、異なる文化を通して学んだ考えや経験を表現させている補習授業校や、多様な視点から第二次世界大戦について考える授業を行っている補習授業校「キャリア講演会」として海外で活躍する日本人を招いて高校生の進路指導をしている補習授業校もありました。こうした意欲的な取り組みを参考に、ぜひ補習授業校ならでのよさを生かしたプログラム開発をしたいと考えています。

また補習授業校には、せっかく日本というルーツを共有する子どもたちが集まっているのですから、そうした子どもたちに、なるべくいっしょに長く楽しく学び続けてほしいと、私たちは考えています。日本につながる仲間と一体感を持ちながら、日本語で新しい世界を知り、自信を持って自分の意見や考えを発信してほしい。それが、グローバル人材の第一歩です。

日本の学校もここ十年で大きく変化しており、主体的・対話的で深い学び、すなわちアクティブ・ラーニングへと舵を切っていることにも留意が必要です。今回の回答の中には「補習授業校は知識を増やしたい学校なので、アクティブ・ラーニング

はやりにくい」というご意見もありました。しかし私たちの調査では、アメリカで学ぶ子どもたちは、日本の同年代の子ども以上に、自分の意見や考えを発表するのが得意だと感じていることがわかっています。次号で詳しくお伝えしますが、特に永住予定の子どもたちは、現地校で積極的に課題学習や話し合いに参加しているようです。現地校で学ぶ子どもたちのよさを生かして、子どもたちを学習の中心に据えてみてはいかがでしょうか。

アメリカの補習授業校は、国語科以外に社会科学の授業を行っているところも少なくありませんが、日本語や日本文化に触れる機会が限られている子どもたちにとって、日本の産業や歴史はイメージがしにくく、とりわけ社会科学の語句が難しい、といった声が挙がっています。そこで私たちAG5プロジェクトでは、国語科と社会科学との合科的な授業を考えたいです。

たとえば、子どもたちが今住んでいる地域について調べて、それを日本語で発信する学習活動です。日本の教科書ではいくつかの都道府県が例として挙げられていますが、海外に住む子どもたちにとって身近に感じられる地域を取り上げることによ

って、地形や産業といった社会科学に必要な語彙や概念とともに、レポートの書き方や発表の仕方といった国語科でのスキルを、より効果的に学ぶことができそうです。テーマに沿って調べたり、みんなの前で発表したりといった、現地校で学ぶ子どもたちが得意な面を發揮させることもできます。詳細は、追ってこの「AG5 だより」でお伝えしていきたいと思っています。

補習授業校のエンパワーメントに向けて

最後に、どの補習授業校でも、優秀な教師の確保に苦心していることがみえてきました。そもそも在外邦人の中で就労できる滞在資格を持つ人は限られています。今回ご回答いただいた補習授業校では、日本の教員免許を持つ人の割合は二割から七割で、免許保持者が過半数を占める補習授業校は少数でした。日本での教職経験のある人は、一割から四割程度です。多くの補習授業校の先生方は、平日は会社員、主婦、語学教師といった別の顔を持ち、週に一回だけの非常勤講師として勤めているのです。

ですから、校内研修会で授業を検討し合ったり、他の補習授業校との

合同研修会を行ったりなど、各校でさまざまな工夫がなされていますが、十分な研修時間を取ることは至難の技です。まして、独自教材を作成することなどは、時間的にも力量的にも難しいという補習授業校がほとんどでした。

そこでAG5プロジェクトでは、成果発信専用のウェブサイトを設け、その中に世界中の補習授業校の先生方が教案や教材を共有できるように場所を作りたいたいと考えています。近々、この「AG5 だより」で公開できる予定です。

補習授業校は世界中に点在していますが、ICTは強い味方になります。すでに、デジタル教科書やインターネットを使った調べ学習など、ICTを積極的に利用している補習授業校もあります。日本の情報を発信したり、在住地と日本とのあいだでコミュニケーションを取ったりするために、ICTを積極的に活用していくことも、AG5プロジェクトですすめていきたいことのひとつです。

補習授業校は、足りないものを補う学校ではなく、グローバル社会で活躍する次世代を育てるフロントティア、それが私たちAG5プロジェクトのモットーです。

AG5 だよ

シリーズ 3

日本人学校・
補習授業校を
応援します！

2018年度「AG5」の取り組み

—「日本人学校・補習授業校応援サイトAG5」と「補習校教員交流Facebook」—

AG5運営指導委員会委員長・明治大学特任教授 佐藤 郡衛

AG5委員・海外子女教育振興財団 教育相談員(元啓明学園初等学校、中学校高等学校校長) 佐々 信行

4・5月号でもお知らせしましたが、今年度も引き続きAG5の事業を行います。昨年度の事業を基本的に引き継ぎながらも、この事業の主旨である「高度グローバル人材の育成」に特化して取り組みます。今回はその概要と成果を紹介するとともに、これらの取り組みに関してインターネットで発信する「日本人学校・補習授業校応援サイトAG5」及び「補習校教員交流Facebook」についてご紹介します。

佐藤 郡衛

佐々 信行

「AG5」の概要と成果

私たちはこれまでの取り組みから在外教育施設でどのようなグローバル人材を育成できるかを明確にしてみました。これがこの事業の基本的な枠組みになっています。

第一は「広い視野、論理的思考力、適応力、自己表現力などのグローバル型能力と英語力を兼ね備えた人材を育成する取り組み」、第二は「日本語能力・外国語能力を併せ持ち、二つの文化と社会を理解し二つの国の架け橋になる人材育成の取り組み」、第三は「世界各国の日系人及び現地コミュニティにおけるリーダーとなるグローバルな人材育成の取り組み」、そして第四は「日本社会・文化、日本語を理解し、日本を支援する親的な人材育成の取り組み」です。これらは日本人学校や補習授業校での今までの実践がベースになっています。

日本人学校における高度グローバル人材の基礎的資質形成のためのプログラム開発―香港日本人学校香港小学校学部での取り組み―

今年度、香港日本人学校香港小学校部の「グローバルクラス」は小学

部四年生から六年生までの三クラスになります。これまでの取り組みを通して、実践を進めていく上での課題がはつきりしてきました。その一つが算数・理科の英語イメージによる授業の改善です。英語で算数と理科を学ぶために教科固有の抽象概念の理解を深めるための支援が必要ですが、その方策について検討します。

また、独自教科であるグローバル・スタディーズの小学六年生用の単元開発を行う上での支援を行います。日本国内で国際バカロレア(IB)のPYP(三〜十二歳対象)に準じたカリキュラム開発を行っている東京学芸大学附属大泉小学校と連携し、特に先生方の研修や単元開発の支援を行っていく予定です。

また、「グローバルクラス」の一期生が小学六年生になりますので、中学部との接続が課題になります。中学部の一貫したカリキュラム・指導方法・評価方法・中学校の英語教育について協同で検討していきます。

日本人学校におけるバイリンガル・バイカルチュラル人材育成のためのプログラム開発―台北、台中、高雄日本人学校(台湾)での取り組み―

台湾の日本人学校には国際結婚家

庭の子供が多く在籍していますが、こうした子供たちをバイリンガル・バイカルチュラルな人材として育成することは、グローバルな視点からも重要な課題です。そのためには日本人学校で学ぶための日本語力を伸ばしていく必要があります。その際、子供たちの生活背景や文化的背景を考慮した日本語指導のプログラム開発が必要です。

台北日本人学校では、昨年度、生活科をベースにした日本語教育に関わる単元を開発しましたが、今年度も小学一・二年生を対象にした総合的な単元開発を進めていきます。

台中日本人学校、高雄日本人学校では、日本語と教科の学習を統合したJSL指導の観点を入れたプログラムの開発を検討します。

昨年、台北日本人学校に取り組みをコーディネートする先生が配置されましたので、台中、高雄の日本人学校と連携して子供の実態に即したプログラム開発とそのため研修を進めていきます。

また、高雄日本人学校は現地の中正国民小學の校舎に入っており、両校の先生が行き来して日本語と中国語の授業を行い合っています。これは大変注目できるものです。実践する先生方の負担を軽減し、こうし

た取り組みを効果的に進める支援策を検討します。

補習授業校におけるバイリンガル・バイカルチュラル人材育成のためのプログラム開発—ダラス補習授業校(アメリカ)での取り組み—

ダラス補習授業校では、昨年度開発した「発見! わたしたちのテキサス、わたしたちの都道府県」という単元を通して、日本語で考え、調べ、発表するという学習を行ってきました。AG5では協同の学習への支援を行いました。子供たちの日本語で考える力、発表する力が大きく向上することが分かりました。今後、小学四〜六年生用の各二単元の学習活動計画を作成していきます。

また、ダラス補習授業校が開発した単元について、オースチン、クリーブランド、コロンバスOH、シカゴ、シンシナティ、セントルイス、ワシントンDCの各補習授業校で実践し、その内容・方法についてTV会議などで協議できるシステムづくりを行います。後述する発信サイトを大いに活用し、補習授業校の実践のネットワークの構築を目指します。このほか、補習授業校の高等部にも注目していきます。高等部の生徒は、英語も日本語も駆使できる高度

なバイリンガル人材として注目できます。そこで、高等部の生徒を対象にした効果的な取り組みについて調査・支援を行っていく予定です。

南米日系人及び現地コミュニティにおける日本語教育・日本型教育・日本文化の発信・普及のためのプログラム開発—アスンシオン日本人学校(パラグアイ)での取り組み—

南米の日本人コミュニティは、日系人や日本人としてのアイデンティティをいかに保持するかが大きな課題です。そこで、アスンシオン日本人学校が中心になり、日本文化の発信及び、日系人・日本人としてのアイデンティティ形成を促進する体制をつくっていきたくと考えます。

現地の日系人や日本人の教育機関であるアスンシオン日本語学校と日本パラグアイ学院への支援を今年度も行っていく予定です。アスンシオン日本語学校での国語や日本語の指導に関する合同研修会を行ったり、日本パラグアイ学院での武道や音楽等の普及策についても検討したりする予定です。

なお新たな取り組みとしては、アスンシオン日本人学校の小学三・四年生用の副読本の改訂があります。新学習指導要領に準拠して改訂しま

すが、この副読本をアスンシオン日本語学校での日本語の教材としても活用できるように開発を進める予定です。日系人の歴史や日本との結びつきなどの内容も入れ、日系人・日本人としてのアイデンティティを形成する一助にしたいと思います。

学校図書館を活用した日本文化等の発信のためのプログラム開発—西大和学園カリフォルニア校(アメリカ)での取り組み—

親的な人材育成は、グローバルな社会ではますます必要になります。そのためには、日本社会や文化を身近に感じてもらえる取り組みを日常的に行っていくことが大切で、在外教育施設は、そうした役割を担っていくことが期待されます。

西大和学園カリフォルニア校では、学校図書館を活用して日本文化を発信するための多様な活動を行っています。交流している現地校や地域住民を対象に日本文化を発信するイベントを開催したり、それに関連する図書や資料を開放したりしています。

このほか、本年度は近隣の学区で日本語を第二言語として指導している現地校の教員を対象に日本語指導に関する資料を提供するほか、二〇二〇年の東京オリンピック・パリ

ンピックに関連する資料や、全米日系人博物館の協力を得て日系人の歴史を中学生が学習するための資料を整備することになっており、必要な支援を行っていきます。

なお昨年度、上海日本人学校を拠点に行った学校採用教員の研修プログラム開発については(四月号参照)、今後、他の日本人学校への横展開を図りたいと考え、本件に関しては海外子女教育振興財団で別にプロジェクトを立ち上げて進めていくことになりました。

インターネットで発信します!

AG5ではウェブサイトとFacebookを活用し、日本人学校・補習授業校の課題解決とグローバル人材の育成のために、教育現場の課題や悩みを持ち寄れる場をつくりました。世界各地の実践を通じて「解決」を目指すものです。

成果発信サイト「日本人学校・補習授業校応援サイトAG5」ご案内
(URL: <https://ag-5.jp>)

●AG5研究レポート
昨年度にスタートしたAG5ですが、提携校や協力校をはじめたくさ

んの方々の協力を得て、すでにいろいろな成果を上げています。取り組みの中で分かってきたことや開発したプログラム等をこのサイトでお知らせしていきます

各テーマの研究レポートは具体的なトピックごとにコンパクトにまとめてあります。順を追って読んでいただいても、面白そうなところから少しずつ見ていただいてもよいかと思います。

ダウンロードできる資料もあります。単元の学習活動計画やワークシートなどは、すぐに授業に役立てていただけたらと思います。「新着ニュース」のコーナーでは、「今」の取り組みをご紹介していきます。

●発表ブース

「グローバル人材の育成」は今に始まったことではありません。海外でも国内でもすでにたくさんの方々の実践が行われています。これらの成果を持ち寄り学び合えば、課題を解決し、新しいアイデアを生み出すための大きな力を得られるでしょう。ぜひ、お手元にある研究の成果や実践記録、教材、さらには新しい提案などを投稿していただければ幸いです。

ここに情報を蓄積して、必要な時に必要なものが取り出せるライブラ

リーをつくっていききたいと思っています。一枚のワークシートから大規模な研究の結果まで、日本人学校や補習授業校の教育に役立つ内容を幅広く提供していただけますよう、お願いします。

また、既存の文献や研究結果等でも広く紹介したいものがある場合は、お知らせいただければ、その著者等にここに発表していただけるよう働きかけ、皆で使える財産を増やすよう努めます。

●談話室

気軽に意見や情報を交換するコーナーです。日本人学校や補習授業校に関連する意見や情報を投稿して交流に役立てていただきたいと思えます。イベントなどの広報の場としてもご利用ください。学校でのエピソードなどをご紹介いただけましたら、楽しくなるかと思えます。

海外子女教育振興財団が入手した海外・帰国子女教育関連の情報も随時お知らせしていきます。見れば何か面白いものがいつでも見つかるページにしていきたいと思えます。

●資料室

各種調査報告、AG5日より、文芸作品コンクール優秀作品、関連サイトリンク集の各コーナーがあります。なお「各種調査報告」には、す

でに昨年度に実施した「補習授業校インタビュー調査」「補習授業校の子ども学習状況調査」の興味深い結果が掲載されています。

●AG5情報

「AG5」の概要や最新の情報をご覧いただけます。

「補習校教員交流[Facebook]」案内
(<https://www.facebook.com/groups/1664125650300837/>)

以前より、たくさんの方々の補習校の先生方から、情報交換や交流の場が欲しいというご希望がありました。同じような立場の先生たちが力を合わせれば、課題を解決したり、よりよい方法を見つけたりすることができるとは思いますが、限られた時間の中で、世界各地で働いている先生たちが交流するのはなかなか難しいことです。

そこで、海外子女教育振興財団の職員が管理者になってTelegramのグループを立ち上げました。補習校の先生たちと応援する人たちがつながり、力を合わせる場として利用していただきたいと思えます。

たくさんの方々に参加していただくことで、このグループを楽しむことができます。ぜひメンバーになって、交流の輪に加わっていただけますよう、また関係

の方々にご紹介いただけますよう、お願いします。

プライベートな写真や情報、家族や友達の間だけのニュースなどは、限られた人だけに閲覧可能な設定にできるほか、「公開グループ」なので、メンバーでなくてもグループのやり取りを見ることができません。

なお、匿名可能なSNSで懸念される無責任な投稿を防ぎ、責任を持った交流を続けていくために、このFacebookは実名で登録・活用していただくことになっています。

まずは、ぜひ一度ご覧ください。成果発信サイトの「談話室」からも入れます。



日本人学校・補習授業校応援サイトAG5
URL: <https://www.ag-5.jp>

AG5 だよ

日本人学校・
補習授業校を
応援します！

補習授業校の児童生徒対象「学習状況調査(子ども調査)」結果報告

AG5委員・首都大学東京 国際センター准教授 岡村 郁子

AG5プロジェクトでは、補習授業校の現状と課題を探るため、昨年、アメリカの補習授業校に通う小5～高3の約5,400人を対象にアンケート調査を実施しました(回答者数3,826人、回答率71%)。お答えいただいた児童生徒の皆さん、先生方・保護者の皆様、ご協力ありがとうございました。調査結果等から現在の補習授業校の子どもの姿や補習授業校に対する思いについて、さまざまなことが明らかになりました。また、日本への帰国予定の有無等による結果の比較、補習授業校と日本国内の学校に通う児童生徒との比較分析を通して、アメリカの補習授業校の特色と課題も見えてきました。今後、本プロジェクトの取り組みに反映させていきますので、その内容をダイジェスト版でご紹介します。

*文中のパーセンテージは小数点以下を四捨五入しています。



調査の概要

○調査日時

二〇一七年九月～十月

○調査事項

補習授業校に通う児童生徒の学習状況や生活態度、学校の授業の感想などについての九十七項目(国立教育政策研究所が実施する「全国学力・学習状況調査」の項目を含む)および属性についての八項目

○調査対象児童生徒数

五四一七人(回答数三八二六六人・男子一七四七人・女子二〇五〇人・無回答二十九人)、回答率七二%

○回答した学校数

アメリカの補習授業校四十九校

○対象学年

小学部五年生～高等部三年生

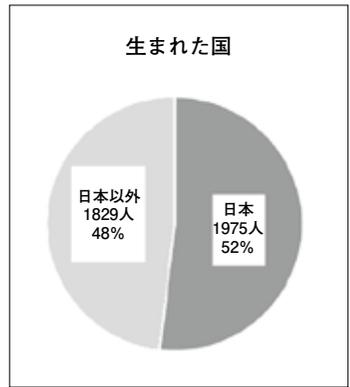
(1) 補習授業校に通う子どもたちの姿

●出生地はどこですか？

「日本生まれ」が五二%、「日本以外生まれ」が四八%で、ほぼ半数ずつという結果でした。

●日本に住んだことがありますか？
アメリカ以外の国に住んだ経験は？

生まれた国



日本での居住経験が「ない」と答えた人が三五%で、全体の約三分の一が日本に住んだ経験がないことがわかりました。

●日本への帰国予定はありますか？

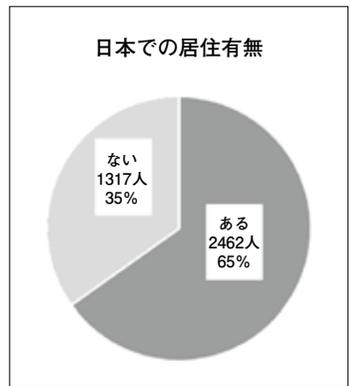
「日本へ帰国する予定」と答えた人が四四%、「アメリカにずっと住む予定」とした人が二〇%、「わからない」と答えた人が三六%です。半数以上の子どもたちが日本へ帰ることが不確定な状況にあることがわかります。

●一番得意な言語は何ですか？

「日本語」と答えた人は五五%です。「英語」または「その他の言語」が日本語より得意とした人が、合計四五%に上りました。

これらの結果から、補習授業校に通う児童生徒の約半数が、日本以外の国で生まれて、アメリカにずっと住んでおり、日本語より英語を得意

日本での居住有無



としているということがわかります。また全体の三五%は「日本居住経験がない」と答えており、「永住か帰国か」について日本へ帰国することがわかっている人は四四%にすぎません。

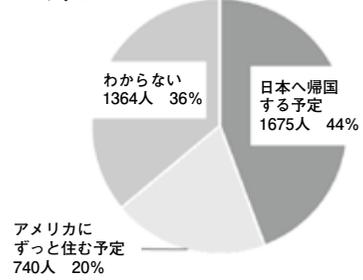
もともとは日本に帰国する児童生徒の教育を目的として設立された補習授業校が、在籍者の多様化により教育内容や方法に工夫を迫られている現状が見てとれるでしょう。

(2) 補習授業校について、どう思っていますか？ 塾や家庭教育師については？

次に、子どもたちの補習授業校に対する率直な思いを聞いてみました。

●補習授業校に行くのが楽しみですか？ やめたいと思ったことは？ 「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」を合わせて、約七割が「楽

将来的に日本へ帰国する予定ですか？
それとも、アメリカにずっと住む予定
ですか？



しい」と回答しました。

理由として約九五%が「友達に会うのが楽しいから」と答え、「好きな授業がある」も七割近くに上りました。

一方、「補習授業校をやめたいと思ったこと」が「よくある」「少しある」を合わせると、半数以上の五九%が「ある」と答えました。

理由は、「宿題がたくさんあるから」「土曜日に他のことがしたいから」「土曜日に遊べないから」がトップスリーでした。

さらに分析を進めると、得意な科目を「日本語」と答えた人は、そうでない人と比べると、「補習授業校に行くのが楽しみ」が二倍多く、「やめたいと思ったことがある」が三分

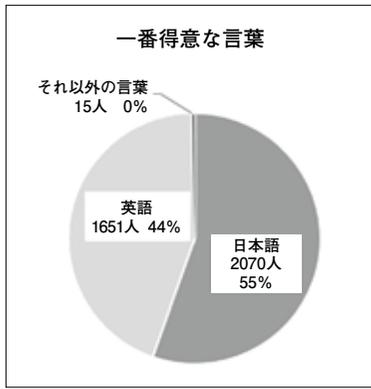
の一と少なく、大きな差があることがわかりました。

なお、参考として、現地校について一部同じ質問をしてみました。「行くのが楽しみ」とする割合は現地校の方が高いものの、「友達に会う」楽しさは現地校・補習授業校ともほぼ八割で同等です。

「好きな授業がある」については、現地校では八割近くが「そう思う」と回答し、補習授業校の四四%を大きく上りました。補習授業校の授業は主に国語と算数／数学に科目が限られますが、現地校では体育や音楽なども行われています。それらも含めて回答していることから、この結果につながったと予想されます。

●勉強時間はどのくらいですか？

「一週間当たりの補習授業校のための勉強時間」を尋ねたところ、「三



時間以上」が二八%、「二〜三時間」が二二%、「一〜二時間」が二五%でした。「一時間未満」が二〇%、「まったくしない」と答えた人も四%いました。

「一日当たりの現地校のための勉強時間」を一時間以上と答えた人が七割近くいるのに比べると、時間数は多くありませんが、金曜日の夜に三時間以上集中して取り組むような場合には、かなりの負担に感じられることでしょう。

●塾や家庭教師を利用していますか？

塾や家庭教師の有無を問う項目については、日本の勉強については九割以上が「なし」と回答し、「日本の受験塾に通っている」人は七%にとどまりました。

アメリカでは大都市部において大手進学塾の進出が顕著ですが、今回の調査協力校の中にはあまり塾の進出していない都市・地域もあったこと、また土曜日に補習授業校に来ることなく平日に塾に通う「現地校+塾」を選択している、いわゆる「補習授業校離れ」の層については今回の結果に含まれていないこと等が理由として考えられるでしょう。

日本語教育を一手に担う補習授業校の役割の重大さを示す結果でもあります。

(3) 帰国予定者と永住予定者の違いについて

次に、「自分自身について」の項目で日本への帰国予定者と永住予定者の集計結果を比較したところ、いくつかの項目で有意な差異が見られました。その一部をご紹介します。

●チャレンジ精神や自己肯定感の高さについて

「あなた自身について」の質問項目のうち、「難しいことでも、失敗を恐れないで挑戦している」では、帰国予定者二四%に対して永住予定者では三四%が「そう思う」と答えており、帰国予定者よりチャレンジ精神が高いことがうかがわれます。

また、「自分にはよいところがあると思う」では、「そう思う」と回答したのは、帰国予定者五三%に対し永住予定者六八%で、一五%の差が見られました。

「自分のことを大切な存在だと感じている」についてもそれぞれ四一%、五六%と、一五%の差があり、永住予定者の方が帰国予定者に比べて、総じて「自己肯定感」が高いことが示されました。

●将来日本で仕事をしたいですか？

「将来日本で仕事をしたくないと思いませんか？」という問いに対し、帰国予定者の八割以上が「当てはまる」

<帰国予定者と永住予定者の違いについて>

		全体		8. 帰国予定/永住予定	
		回答人数 (無回答含む)	%	日本へ帰国 する予定	アメリカにずっ と住む予定
		3826	100%	1675	740
Q1. 物事を最後までやり遂げて、うれしかったことがある。	当てはまる	2713	71.3%	73.9%	68.2%
	どちらかといえば、当てはまる	922	24.2%	22.3%	25.9%
	どちらかといえば、当てはまらない	136	3.6%	2.8%	4.5%
	当てはまらない	34	0.9%	0.8%	1.1%
Q2. 難しいことでも、失敗を恐れなくて挑戦している。	当てはまる	1075	28.3%	24.4%	33.5%
	どちらかといえば、当てはまる	1781	46.8%	48.4%	45.0%
	どちらかといえば、当てはまらない	801	21.1%	23.4%	17.6%
	当てはまらない	148	3.9%	3.6%	3.5%
Q3. 自分にはよいところがあると思う。	当てはまる	2222	58.5%	52.7%	68.4%
	どちらかといえば、当てはまる	1203	31.6%	34.7%	24.9%
	どちらかといえば、当てはまらない	270	7.1%	8.7%	4.6%
	当てはまらない	106	2.8%	3.7%	1.6%
Q4. 友達の前で自分の考えや意見を発表することは得意だ。	当てはまる	1377	36.2%	33.9%	40.9%
	どちらかといえば、当てはまる	1296	34.1%	32.1%	34.3%
	どちらかといえば、当てはまらない	798	21.0%	23.6%	18.5%
	当てはまらない	329	8.7%	9.9%	5.9%
Q13. 自分のことを大切な存在だと感じている。	当てはまる	1785	47.0%	40.8%	56.2%
	どちらかといえば、当てはまる	1398	36.8%	40.3%	31.1%
	どちらかといえば、当てはまらない	470	12.4%	13.9%	9.6%
	当てはまらない	143	3.8%	4.5%	2.3%

「どちらかといえば当てはまる」と答えました。

一方、永住予定者の中でも二五％近くが「将来日本で仕事をしたい」と答えています。英語を第一言語としながら補習授業校で日本語を学び、将来は日本で働くことを考えるグローバルな人材の育成のために、補習授業校が大きな役割を果たすと考えられます。

またこれとは逆に「将来日本以外の国で仕事をしたい？」という問いに対し、永住予定者の八五％以上が「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答していますが、その割合は帰国予定者の場合も約四五％に上り、いずれも世界を舞台にしたキャリア形成が期待されます。

(4) 高校生の意識(回答数四一五人)
高校生に「補習授業校に通い続けている理由」と「卒業後の進路」を聞いてみました。

高校段階で補習授業校に通っている生徒たちに、まず、「高校まで補習授業校に通い続けている理由(複数回答)」を尋ねました。

一年生・二年生で特に多い回答を得たのは、「友達に会えるから」「将来の役に立つと思うから」の二つで、それぞれ六〇七割でした。

次に多かったのが「親が勧めるから」で、一年生・二年生ではほぼ四割、三年生でも二割を超えます。

また、すべての学年でほぼ二割が「授業が楽しいから」「行事が楽しいから」「日本の勉強をするのが好きだから」と答えており、主として友人に会える楽しみに加えて、将来を見据えて補習授業校に通う中で、さまざまな楽しみを見出して高校まで通い続けていることがわかります。

さらに「卒業後の進路」では、一年生では「日本の大学等に進学予定」が半数を超え、二年生でも四〇％を上回りますが、学年が上がるにつれて「アメリカの大学等に進学」の割合が増えて三年生では五〇％を占めています。

日本の大学へ進学したい希望があっても、実際には入試制度や、日本語の問題などで断念するケースが多いことも予想され、日本の大学の受け入れ体制の拡充整備が大いに期待されるところです。

(5) 国内調査と結果を比べてみる
と……

今回実施した調査では、日本国内で小学六年生と中学三年生を対象として実施されている「全国学力・学習状況調査」(国立教育政策研究所)

<高校生の意識>

		高校1年生	高校2年生	高校3年生
		205人	168人	42人
Q19. 高校まで補習授業校に通い続けているのは、どのような理由からですか？当てはまるものを全て選んでください。	友達に会えるから	65.4%	69.0%	54.8%
	授業が楽しいから	20.5%	25.0%	23.8%
	日本の勉強をするのが好きだから	19.0%	29.8%	26.2%
	わかりやすく教えてもらえるから	11.7%	14.9%	16.7%
	行事が楽しいから	26.8%	33.9%	21.4%
	将来の役に立つと思うから	63.9%	73.2%	57.1%
	親がすすめるから	39.5%	39.9%	23.8%
その他	9.8%	9.5%	14.3%	
Q20. 卒業後の進路はどのような予定ですか？	日本の大学等に進学する予定	53.2%	43.5%	40.5%
	アメリカの大学等に進学する予定	33.2%	47.0%	50.0%
	日米以外の国の大学等に進学する予定	0.5%	1.2%	-
	その他	7.8%	4.2%	2.4%

の質問紙調査と共通する項目についても尋ねました。補習授業校と日本国内のそれぞれを比較して、大きな差異があった点を紹介します。

●自分にはよいところがあると思いますか？

「当てはまる」と答えた国内の小学六年生三九%、中学三年生二八%に対して、補習授業校ではそれぞれ六二%、五〇%で、補習授業校が国内を大きく上回りました。

「どちらかといえば当てはまる」を合わせると、国内の小学六年生七八%・中学三年生七一%に対して、補習授業校ではそれぞれ九三%・八七%と、自己肯定感が圧倒的に高いことがわかります。

●友達の前で自分の考えや意見を発表するのは得意ですか？

補習授業校では小学六年生・中学三年生ともに「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」の合計が約七割で、国内の五割を大きく上回りました。

補習授業校に通う子どもたちが、平日の現地校の授業を

通じてプレゼンテーションや質疑応答に慣れていることがうかがえます。現地校では小さい頃から「Show and Tell」などでクラスの前に出て自分の考えをまとめて話す機会が与えられ、授業内でのプロジェクトワークも多くあります。また日本と比べて「間違いを恐れる」ことなく発言する傾向もあるため、このような差異が生まれるのではないのでしょうか。

●一日何時間くらい、日本語のテレビやDVD、動画サイトを視聴していますか？

補習授業校の小学六年生では約六五%が一時間未満でした。「四時間以上」と答えたのは、国内の小学六年生一七%に対して、補習授業校ではわずか五%で、中学三年生も同傾向です。児童生徒ともに「まったく見ない」も一五%おり、日本に比べてテレビやDVD等の視聴時間は多くありません。

●一日何時間くらいゲームをしますか？

「一時間未満」としたのは国内で約四五%に対し、補習授業校では約六五%でした。補習授業校では小学六年生の二割以上、中学三年生の三割以上が「まったくしない(見ない・聞かない・しない・持っていない)」

と回答、補習授業校の子どもたちのゲームに充てる時間は圧倒的に少ないことがわかります。

●将来日本以外の国で仕事をしたいですか？

「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と答えたのは小学六年生と中学三年生ともに、日本国内は約三五%だったのに対し、補習授業校では六五%でした。海外に学ぶ子どもたちが将来の活躍の舞台を世界にイメージしていることがうかがえます。

以上、結果の一部をダイジェストでお伝えしました。

アメリカの補習授業校で学ぶ子どもたちの姿、そして、その日常を将来のグローバルな活躍へとつなげる上での課題も、少し見えてきたのではないのでしょうか。

「日本人学校・補習授業校応援サイトAGS」(<https://ags.jp>)には、ここではご紹介できなかった詳細な調査結果を掲載いたしますので、ぜひご覧のうえ、ご質問・ご感想等をいただければ幸いです。

また、六月号でお知らせしました「facebookへも、皆さまからのご投稿をお待ちしています。」

(<https://www.facebook.com/groups/1664125650300837/>)

AG5 だよ

日本人学校・
補習授業校を
応援します！

海外で生活する子どもの教育を担う教師たち — AG5国内研修での学び —

AG5委員・文部科学省国際教育課外国人児童生徒等教育支援プロジェクトオフィサー 近田 由紀子



AG5は、高度グローバル人材育成の最前線にいらっしゃる在外教育施設の先生方を支援するため、現地へ向けての情報提供や現地での研修・日本国内での研修および助言等を行っています。

本稿では特に、海外で新しいプログラム開発を行っている教師が参加した日本国内での研修について取り上げ、子どもたちを高度グローバル人材へと成長させる教師の感性や能力が、どのようにして磨かれるのか、参加者の充実した学びの様子や今後に向けての期待等からお伝えします。

国内研修概要

参加者は、AG5プログラム開発の拠点である次の研究提携校から派遣されました。国際バカロレア（IB）に準拠した実践を行っている香港日本人学校、二言語能力と二つの文化や社会を理解する能力を育成するための取り組みを行っている台湾の三つの日本人学校とダラス補習授業校、日本人学校を日本文化の発信の拠点として位置づけ、現地の日本人コミュニティのリーダー養成や親日的人材を育成する取り組みを行っているアスンシオン日本人学校、そして教員の指導力向上の取り組みを行っている上海日本人学校です。それぞれの国内研修の場や内容のポイントは下記の表に示す通りです。

参加者の学び

国内研修報告書全体を概観しますと、大きく四つのタイプの学びがありました。

- ① 新たな知識・方法を学ぶ
 - ② 実践を比較して学ぶ
 - ③ 日本型教育の良さを知る
 - ④ 今後の展開を探る
- 本稿で全てを紹介することはできませんが、それぞれについて特徴的

研究提携校	国内研修場所	内容のポイント
香港日本人学校 (IBに準拠した教育実践の研修)	ぐんま国際アカデミー初等部、東京学芸大学附属大泉小・国際中等教育学校、海外子女教育振興財団	<ul style="list-style-type: none"> ・イメージ教育の視察 ・「探究科」や「MYP」の授業参観 ・英語教育の方法について受講
台北・台中・高雄日本人学校 (日本語指導等に関する研修)	静岡県浜松市立南の星小学校、同市立瑞穂小学校、静岡県菊川市立岳洋中学校、日本語教育学会主催シンポジウム（日本語教育学会主催：文部科学省「外国人児童生徒等教育を担う教員養成・研修モデルプログラム開発事業」受託事業シンポジウム）、海外子女教育振興財団	<ul style="list-style-type: none"> ・公立学校にける日本語指導体制視察 ・「教科と日本語の統合学習」による授業の参観、外国人児童生徒教育担当教員との懇談 ・教員研修に関する情報収集 ・台湾の日本人学校における日本語年間指導計画について協議
ダラス補習授業校 (日本語指導・帰国子女教育に関する研修)	啓明学園、市川学園、首都大学東京、東京学芸大学附属大泉小・国際中等教育学校	<ul style="list-style-type: none"> ・国際学級の教材や授業の参観 ・デジタル教科書等の活用視察 ・国際副専攻（グローバル人材育成AO入試）の帰国生との懇談 ・「探究科」や「MYP」の授業参観
アスンシオン日本人学校を中心とする地域：アスンシオン日本語学校、日本パラグライ学院（日本文化発信のための資料作成方法・現地の子どもの向け日本語指導に関する研修）	海外子女教育振興財団、海外移住資料館、静岡県浜松市立南の星小学校、同市立瑞穂小学校、同市外国人学習支援センター、静岡県菊川市立岳洋中学校、東京都小平市立上水中学校、啓明学園、東京学芸大学国際教育センター、東京学芸大学附属大泉小・国際中等教育学校	<ul style="list-style-type: none"> ・移民カルタ等資料作成方法受講 ・公立学校に在籍する日系人児童生徒への「教科と日本語の統合学習」参観 ・地域の日本語教室参観 ・国際学級の教材や授業の参観 ・日本語指導方法に関する講義受講 ・「探究科」や「MYP」の授業参観
上海日本人学校 (新規採用「学校採用教員」の研修)	海外子女教育振興財団	指導力向上のための講義やワークショップ

な具体例を示しながら成果をお伝えします。

① 新たな知識・方法を学ぶ

バイリンガル・バイカルチュラルの視点から日本語力向上を目指す台北・台中・高雄日本人学校や北米のダラス補習授業校では、そのノウハウについて国内の先進校の実践にヒントを見出して、それぞれの地域の子どもたちの実態に即したプログラムを開発しようとしています。

台北・台中・高雄からの参加者は、外国人集住地域にある日本語指導の先進校（静岡県浜松市立南の星小学校、同市立瑞穂小学校、菊川市立岳洋中学校）を視察し、「教科と日本語の統合学習」や日本語の指導体制について学びました。教師や支援員の表情、実物や写真、絵などの使用、個別の丁寧な指導、児童の発達段階や能力に合わせて簡単に書き直したリライト教材やワークシートの有効活用、子どもたちの意欲的な活動や集中力等について報告しています。

また、学級担任、地域の支援者や保護者等との連携・協力は、台湾でも取り入れたいこととして受け止めたようです。訪問先の教師との協議において、子どもたちの日本語を学びたいという理由が①友人とのコミ

ュニケーション②授業が分かりたい、クラスとつながりたい等であることを確認し、在留国の環境は異なっても子ども「学びたい」「つながりたい」という気持ちや願いは同じであることに改めて気づかされた様子でした。

ダラスからの参加者は、啓明学園、市川学園、首都大学東京、東京学芸大学附属大泉小・国際中等教育学校の視察を通して、「帰国生の「生の声」や彼らへの期待を知る一方、補習授業校で自尊心が低くなりがちな子どもたちへの教育について、学んだり改めて気づかされたりしたことを報告しています。例えば、「教え方」の前に、子どもに寄り添うこと」「子どもが興味を持ちやすい教材を選ぶこと」「思考したことを文章にすること」「多岐にわたる文章を読むこと」の大切さです。さらに「発問は、子どもたちの探究心をくすぐり、子どもたち自らが「興味を持って、それをとことん調べて理解しよう」とする姿勢を導き出すものであること」や、「教師 同士で『問い』の立て方を相談することも有効であること」などにも触れ、より具体的な指導スキルについても報告しています。補習授業校でも子ども理解が第一であることや、児童生徒への問いか

け一つでも授業展開が変わることを実感されたようです。このような基礎・基本は、今注目されている「主体的・対話的で深い学び」を支えるものであり、海外で子どもたちを教える教師にとって価値あるものとして学ぶことができたようです。

② 実践を比較して学ぶ

AG5のプロジェクトが始まる少し前から香港日本人学校で取り組まれていたグローバルクラス（以下香港GC）は、他の研究提携校に先駆けて実践を進めています。その手ごたえも課題もはっきりしているため、国内研修にも明確な問題意識を持って望み、先進校の取り組みと自分たちの実践を重ねたり比較したりして学びを深めていきました。

イマージョン教育を進めている「ぐんま国際アカデミー」を視察した際には、「教科担任制をとっているところは、香港GCと同じ。今後、日本人教師とネイティブ教師の二人担任制でどちらも対等の立場で学級運営にあたる体制は大いに参考になる」と記しています。

東京学芸大学附属大泉小学校「探究科」の視察においては、IBに準拠した単元開発そのものの学びとともに、「児童の思考の評価」について

着目していました。「ルーブリックというツールを使うことに力を注ぐのではなく、あくまでもロードマップ、自己評価の支援ツールとして目標とする児童の姿を描いて利用していくこと」に注目し、自分たちが目指すべき方向性を確認していました。

すでにIB校としての実績がある東京学芸大学附属国際中等教育学校SGH発表会での生徒のプレゼンテーションや、英語担当教員による講義でも、香港の子どもの姿を重ねながら熱心に耳を傾けていました。香港GCの場合、これまで数回にわたって行われた日本の先進校での研修を重ねることで独自のプログラム開発が推進されたといえます。海外のインターナショナルスクールにはない日本人学校の新たな魅力が、このようなプロセスを経て生まれていることはとても興味深いことです。

③ 日本型教育の良さを知る

パラグアイのアスンシオンでは、南米日系人コミュニティに適した日本型教育・日本語教育のプログラム開発を目指しています。そのため、参加者たちが日本での派遣研修を通して学んだこととして、次のような点が挙げられました。

・日本在住の日系人が求められてい

る日本語力と外国に住む日系人が求められている日本語力の違い（生活言語能力、学習言語能力）

- ・日本語の評価方法
- ・グローバルスタンダードの教育の必要性

- ・児童生徒一人ひとりのことを考えた教材作り

また所属校に還元したいこととして
・規則やマナーはみんなが見えるところに掲示

- ・多読の本や『はやくちこぶた』『言葉のテール』等の教材
- ・ビブリオバトル

- ・CAN-DOポートフォリオを作成
- ・日本の文化・習慣の継承（掃除、靴を揃えておく、挨拶、時間厳守等）

について報告しています。この中でも、やはり「日本の文化・習慣の継承（掃除、靴を揃えておく、挨拶、時間厳守等）」への関心は高く、教室以外の場所でも盛んに記録写真を撮っていたことが印象的でした。

④ 今後の展開を探る

AG5国内研修では、教育現場の視察だけでなく、運営指導員委員・研究員らとともにこれまでの実践を振り返り、今後の展開を検討するための協議もじっくりと行いました。

香港日本人学校でのプログラム開発については、香港GCのこれまでの実践資料収集、訪問調査の実施、小四・五の学習の評価法、評価基準の開発、グローバルクラスの成果の可視化等を進めることを決めました。

台北・台中・高雄日本人学校でのプログラム開発については、台北・台中日本人学校における日本語指導年間計画を子どもたちの生活や教科学習と関連させて作成することや、高雄日本人学校と現地校との交流の方法について協議をしました。

日本語指導年間計画作成では、日本語支援における台湾の子どもたちのニーズと日本の学校に在籍する子どもたちのニーズとは異なることから、視察での学びを生かしつつ、より適切な指導内容・方法について活発な議論がなされたことが印象的です。

また、アスンシオンからの参加者は日本での国内研修を終えてパラグアイに帰国後、アスンシオン日本人学校での報告会を実施しました。ここでは「AG5プロジェクトに活かしたいこと」として、

- ・パラグアイ版移民カルタ等の作成
- ・アスンシオン日本人学校、アスンシオン日本語学校の生徒が利用できる、日系人移住の歴史も含むパ

ラグアイ社会科の副読本を作成を発表しています。具体的な取り組みを明確に打ち出して前進しようとする姿は、報告会に参加した方々にも輝いて見えたことでしょう。

教師の成長と広域ネットワークへの期待

新しいことを始めようとする時、意欲的にチャレンジしようとする教師が全体を牽引する一方で、戸惑いを隠せず躊躇する教師も少なくないでしょう。しかし、今回の取り組みにおいては、実際に先進校の教育を目の当たりにし当事者の話を直に聞くなどして学ぶうちに、自分たちにもできそうだ・やってみようという気持ちに変化していくことが分かりました。報告書には「想定以上の成果」という表現もありました。

さらに、国内研修を受け入れた日本の教師たちへの影響も大きく、彼らに重要な気づきをもたらしてくれました。海外で日本語や日本人としてのアイデンティティを大切にしている教師に教育活動をされている教師の存在、エネルギーに学び取る姿勢とする勢いや願いに感銘を受けたのです。内なるグローバル化を大いに刺激する機会でもありました。

また、北米のダラスや南米のアスンシオンの教師のように、日本での研修をともにすることで、海外にいる「同志」として勇気づけられたと言います。言い換えれば、それだけ海外で孤軍奮闘されている方々が多いのかもしれない。

このほか、海外に赴任する前の研修として、上海日本人学校の協力を受け、新規に採用された同校の学校採用教員に対して「学級経営・生活指導・危機管理」や「授業」等に関する講義やワークショップを行いました。派遣前に効果的なプログラムを把握するうえで有意義な取り組みになりました（本年度より別のプロジェクトに移行）。

このように日本での研修は、海外での明日の授業にすぐにも活かせるノウハウの習得のみならず、教師たちのネットワーク構築にも一役買えたようです。この広域ネットワークによる多様な情報共有や学び合いは、新たな教育への気づきを促し、教師自身がグローバルな人材として成長するチャンスとなるはずですね。そして、そこで磨かれる教師の感性や能力が、子どもたちをまさに高度グローバル人材へと成長させる大きな力となることを確信させてくれました。

AG5 だよ

日本人学校・
補習授業校を
応援します！バイリンガル・バイカルチュラル人材の育成に向けて
——台北日本人学校における日本語指導への取り組み——

AG5委員・東京学芸大学国際教育センター准教授 見世 千賀子

2018年4月から台北日本人学校では、新たに近藤裕敏校長先生の下、飯塚由美先生をプロジェクト・コーディネーターとして、また日本語教育が専門の服部美貴先生（国立台湾大学日本語文学系専任講師）に協力者として加わって頂き、台湾でのAG5プロジェクト2年目がスタートしました。今回は、台北日本人学校で取り組んできた「日本語指導を必要とする子供への日語補習のプログラム開発」について、(1)DLAを活用した日本語力の把握、(2)日語補習の授業実践を中心に、これまでの取り組み状況や成果、課題を報告します。



二〇一八年度も昨年度と同様に、台湾の日本人学校には、日本と台湾の国際結婚家庭の子供を中心に、日本語指導が必要な子供が多く在籍しています。台北日本人学校（以下、台北校）は小学一・二年生において、週一回、五時間で授業が終わる水曜日の放課後に日本語の補習授業を行っています。これは「日語補習」と呼ばれ、一回三十五分間、五月〜翌年二月の間に全三十一回行われています。今年度は、両学年共、約二十名ずつの希望者が参加しています。

台北校では、子供の実態をよく把握している各学年の担任教師陣（各四名）が日語補習も担当しています。日本国内の学校における外国人児童生徒への日本語指導体制は、通常、日本語指導の担当者と在籍学級の担任は別であり、どう連携を図るかが課題となっています。台北校の体制は、在籍学級と日語補習を有機的に連携させて指導できている点で、特にメリットがあると言えます。

DLAを活用した子供の日本語力の把握

一八年度は、まず日語補習を希望する子供を対象に、その日本語力の把握を試みました。方法としては、

個々の子供の言葉の力の弱みや強みを知り個々の指導に役立てるため、文部科学省の「外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメント」(DLA)を活用しています。

DLAでは、「はじめの一步としての導入会話と語彙力チェック」、「話す」、「読む」、「書く」、「聴く」の五つの観点から、子供の日本語力を把握することができます。本来、DLAは日本国内の外国人児童生徒等を対象にしているため、台湾在住の子供たちには適さない部分もあることや測定可能な分野も限られていることに加え、時間的制約やテストの力量の問題があります。それでも本プロジェクトではできるところから始めてみることにしました。

まず「はじめの一步としての導入会話と語彙力チェック」を行いました。担当したのは飯塚先生、服部先生、教務主任の野々村先生です。また、子供の言語能力を捉える上で、母語の発達状況はとても重要な要素です。そのため、中国語の力も把握するために、同じ内容を中国語でも実施しました。担当は、台湾人の中国語講師の簡先生と林先生です。チェックは、昼休みの時間に一人当たり約五分程度、数日間で行いました。導入会話では、「名前は何ですか」

「何年生ですか」「何歳ですか」「誕生日はいつですか」「ひらがなは読めますか・書けますか」「カタカナは読めますか・書けますか」「○○語は読めますか・書けますか」など合計十六の問いがあります。

語彙力チェックでは語彙カードを使用して、描いてある絵の内容を単語レベルで発話させます。例えば、体の一部、動植物、学校にあるもの、日常生活の動作、形状等で五十五項目あります。

新一年生の結果は全体として、導入会話の質問にはほとんどの子供が日本語も中国語も九〇以上の割合で回答できていました。両言語とも導入会話と比較すると正答率は語彙力の方が低く、語彙力チェックの正答率は日本語では八割、中国語では七割の子供の数が最も多くなっています。導入会話で使用される程度の日本語や中国語には、家庭や入学前の幼稚園等で触れてきたことが伺えます。日本語の語彙では、「目」「口」は言えるが「まつげ」「唇」はわからない、「屋根」や「引き出し」が回答できない子供が多くなりました。これは、日常でよく聞く語彙は身に付いているが、あまり耳にしない語彙は身に付いていないことを示しています。例えば「屋根」については、台北では

屋根のないコンドミニアムに居住することが多いという環境に影響されていることが考えられます。

個々の子供の語彙力を見ると、正答率が「日本語の方が高い」か「中国語の方が高い」のいずれかにほぼ分かれます。両言語とも語彙で十割正答した子供はいませんでした。個人差はありますが、全体としてはよく回答できているとの印象です。

以上より今年度、日語補習を受けるほとんどの子供は一年生のスタート時点で、基本的に平易な日常会話が可能で、日常生活レベルで使用する簡単な語彙についても、ある程度習得できていることが把握できました。

新二年生は、導入会話の正答率については、数名の子供は七〜九割となつていますが、ほとんどの子供が十割できています。中国語についてはほとんどの子供が九〜十割できています。日本語の語彙力は、七〜八割と九〜十割が約半数ずつで、新一年生と比べて全体的に正答率はやはり高くなっています。

新二年生は、昨年十二月に、第一回目のDLA調査として同じ導入会話と語彙力のチェックを行つています。両方のデータがある子供について、昨年十二月と今年四月の結果を比較すると、日本語の語彙力につい

ては、十四名が上がっていて、三名は下がっています。中国語については、十一名が上がっていて、八名が下がっています。

テストを担当した中国語の先生からは、一部の子供は昨年比べて母語である中国語が出にくくなつていくとの感想が聞かれました。日本人学校に通うこと中国語力への影響が伺えます。

今年度の開講式では保護者に向け、子供たちがグローバル人材としてとても有望であること、日語補習でしっかり日本語を学習すると同時に、家庭では中国語も大事にしてほしいということをお伝えしました。

日語補習の授業実践

AG5の日本語指導は、子供たちが「今」持っている言葉の力を駆使して、「いざれ」ではなく「今」も在籍クラスの授業に参加できるように支援するプログラムを目指しています。

そのためには、「教科学習と関連付けた日本語指導プログラム」の開発が不可欠です。今年度前半の日語補習プログラムは、二月に実施した国内研修会で、参加した先生方と共に計画を作成し、実践しながら、修正を加えることにしました。

新一年生は、先のDLAの結果と四月に入学してから五月十六日の日語補習の開講式までの学校での様子に基づき、一年生の先生方が判断し、子供を次の三グループに分けて指導しています（おおよそ六〜七名ずつ）。

①「話す・聴く」に重点を置いたコミュニケーション能力を高めるグループ（主に学校生活でのコミュニケーションがスムーズでない子供を対象）

②「読む」に重点を置いた指導をするグループ（主に会話にはさほど問題はないが、読む・書くに課題がある子供を対象）

③「書く」に重点を置いた指導をするグループ（主に会話に問題はなく音読もできるが、書くことに課題がある子供を対象）

まず、第一回となる開講式では、子供たちは簡単な自己紹介を行いました。二、三回目は学校生活について学ぶ内容になっています。例えば水泳学習の事前説明について、在籍クラスでの全体説明では十分に理解するのが難しいであろう内容の確認が行われました。①の会話重視グループでは、輪になって一つのぬいぐるみを渡し合い、ぬいぐるみを持つた人の名前をみんなで言い合うゲー

ムや、手製のすごろくを使い、止まったマスに書いてあることを読むゲームをしていました。②の「読む」に重点を置くグループでは、学校で使うものの絵等がしりとりで描かれているプリントを使い、名称を言ったり、ひらがな表で五十音の確認をしたりしていました。③の「書く」グループでは同じプリントを使い、ひらがなで名称を書くところまで進めています。先生方の工夫により、子供たちは楽しく言葉を学んでいました。

当初の計画ではその後、国内の学校の日本語指導で外国人児童生徒を対象に実践されているJSLカリキュラム（日本語と教科の統合学習）の視点をういた、国語や算数、生活科や行事の先行学習を構想していました。しかし実際に日語補習を進めてみると、台北校の実態とずれがあるようです。今後その要因を明らかにし、修正していきたいと思えます。新二年生は、主に習熟度面から四つにグループ分けをしています。導入会話や語彙力チェックでも正答率が低めだった子供は三〜四名程度の少数のグループにして、教師とより密なコミュニケーションが図れるようにし、後は五名前後のグループとなつていきます。開講式では一年生

と同様に自己紹介を行いました。紹介の文章はよりレベルの高いものになっています。一人ずつ事前に次のようにワークシートのかつこの空欄に内容を記入し、当日それを基に全員の前でスピーチをしました。

〔例〕「わたしの名は(〇〇)です。わたしの好きな食べ物(ねん土)です。なぜならば(ねん土)をつかっているいろいろな形ができるからです。わたしは日本(が)が好きです。どうしてかという(と)もだちとしゃべれるからです。これから、まい週水(よう)日に日本(ご)ほしゅうをやりま(す)。わたしは(日本)ごをおぼえるの(を)が(ん)ば(り)たい(です)。(書)く(も)が(ん)ば(り)たい(です)。これ(で)わた(し)の(ス)ピー(チ)を(お)わ(り)ま(す)。」

この自己紹介のスピーチは、自分



の意見を伝えたり、理由を説明したりする日本語のスキルを学ぶこともでき、教科学習にもつながるものになっています。台北校の先生方はICT機器の使用に慣れていてとてもよく活用されています。二回目以降は、先生方が順番に主にキーノート(プレゼン資料作成アプリ)を利用してねらいにそった教材を作成し、子供が楽しくわかりやすく学べる工夫をされています。基本的にどのグループも同じ教材を使用して指導を行っています。

例えば子供が見て喜ぶ写真を映し出し、様々な擬態語(ふわふわ、はらはら、すくすく等)を学習していました。子供たちは、気球が飛んでいる写真や猫がミルクを飲ませてもらっている写真等を見て、何をしているところか、活発に言い合い、日本語に多く使用される擬態語を学んでいました。この日語補習は、単元自体を扱うものではありませんが、在籍学級での教科学習に関連付けられた意義ある実践です。

日語補習は週に一回のみですが、先生方はその効用を次のように捉えています。

・少人数で行うメリットで、子供たちに居場所を与えることができている。

・わからないことも恥ずかしがらずに質問することが出来る。
在籍クラスにおいても、これらのことが可能になるような指導を目指したいと考えています。

授業にJSLカリキュラムの五つの視点を

子供たちは多くの時間を在籍学級で学んでいます。また、小学三年生以上になると学習内容の抽象度がより上がっていきます。しかし、台北校では日語補習は二年生までです。日本語指導を必要とする子供が在籍するクラスでは、やはり通常の授業における日本語指導の視点が必要です。その際、役立つのがJSLカリキュラムの考え方です。特に次の五つの支援の視点を意識して頂けると良いと思います。

○理解支援 「わかった!」と思える手立て(例:視覚化する、比喻を利用する、例示する)

○表現支援 理解したこと、考えたことを自ら発信できる手立て(例:モデルを示す、語彙や表現を例示し選択させる)

○記憶支援 学習したことを定着させるための手立て(例:手や体を動かす動作と結びつける、リズム

カルに言う)
○自律支援 自分で学習が進められるようにする手立て(例:わからない時は先生や友達に聞けるように、自分で調べられるように)
○情意支援 やる気、学習に興味・関心・意欲を持たせる手立て(例:学習の見通しを持たせる、達成感を持たせる)

こうした取り組みは、すでに多くの先生方が行っていることかと思いますが、今一度日本語がよく理解できていない子供の目線にたつて、自らの授業を振り返ってみて頂ければと思います。台北校では、昨年十二月と今年五月に先生方を対象にJSLカリキュラムの研修会を行いました。九月には台中日本人学校でも合同研修会を実施する予定です。日本語指導を全学年で重要な基本的課題として位置付け、全体で取り組む体制を作ることが必要です。

今後も台北校の日語補習プログラムのついては、先生方と意見交換をしながら検討を進めたいと思っています。子供の多様性を活かし、台湾にもルーツのある子供たちがダブルであることを肯定的に捉え、アイデンティティの形成につながる日本語指導ができればと思います。

AG5 だよ

日本人学校・
補習授業校を
応援します！

日本人学校における高度グローバル人材育成のためのプログラム開発 ——香港日本人学校の取組と連携する東京学芸大学附属大泉小学校——

AG5 研究員・東京学芸大学附属大泉小学校副校長 細井 宏一

日本人学校・補習授業校を応援する「AG5」。在外教育施設を高度グローバル人材育成の拠点にするための実証研究を実施し、その先導的な実践を広く他の学校に普及させていくとともに、日本人学校・補習授業校が抱える課題解決を行っていくという趣旨のプロジェクトです。5つのプロジェクトがあり、今回紹介する事業はその内の一部で、特に「日本人学校における高度グローバル人材の基礎的資質形成のためのプログラム開発」が目的です。この分野においては香港日本人学校小学部グローバルクラスが先進的な取組を実施していますが、東京学芸大学附属大泉小学校も連携してプログラム開発を行っていきます。



なぜ、学芸大学附属大泉小学校と連携なのか

なぜ、香港日本人学校小学部グローバルクラスは本校（東京学芸大学附属大泉小学校）と連携することになったのか。それは香港日本人学校の取組と本校で現在取り組んでいる研究に多くの共通点があるからです。

香港日本人学校では、小学四年生から六年生までにグローバルクラスと呼ばれる少人数のクラスを特設し、英語のイマージョン教育を行っています。さらに、国際バカロレア（以下、IB）の教育プログラムも参考にしながら、独自教材として「グローバルスタディーズ」という新しい学習に取り組み、その単元を開発しています。

一方、本校では現在、文部科学省の研究開発学校指定を受け、グローバル社会に生きる力を育成するため、IBを参考にしながら新教科「探究科」の開発研究に着手しています。この「探究科」と「グローバルスタディーズ」のねらいが類似しているため、研究連携をしていくことになったのです。

IBに注目した理由

両校ともIBを参考に独自の教科

を立ち上げています。なぜ、IBに注目したのでしょうか。

一つは、IBの理念に「多様な文化の理解と尊重の精神を通して、よりよい平和な世界を築くことに貢献する探究心、知識、思いやりに富んだ人材の育成」があり、これは本校のめざす児童像とほぼ同じであることです。おそらく香港日本人学校も同様と思われます。そしてもう一つは、IBには国際教育の一貫したプログラム（小学校レベルに対するPYP〈Primary Years Programme〉、中学校レベルでのMYP〈Middle Years Programme〉、高校レベルでDIP〈Diploma Programme〉）があることです。

文部科学省もIBに注目しています。その理由はおもに二つあります。一つは、IB教育のプログラムは知識暗記型学力や教え込み授業ではなく、アクティブラーニングと言われるような、グローバル型の学力を育成する授業が多く展開されることが期待できること。そしてもう一つが、IB認定校になると国際的に通用する大学入学資格（国際バカロレア資格）を与えられ、大学進学へのルートを確保できることです。

つまりDP認定校になると、卒業前の共通試験で一定のスコアをとれば、IBを認証している世界の大学

に無試験で入学できる制度があるのです。日本でもこれに対応し、入学資格を与える大学も増えているようです。このことは、大学入学方法の選択肢が広がることとなり歓迎されています。文部科学省は二〇二〇年までに全国でIB認定校等を二〇〇校以上に増やすことを目標として掲げています。DP認定をめざす高校は増加しており、この動きはしばらく継続すると思われます。

IB認定校へのハードル

IBの認定校にはすぐになれるのでしょうか。実は幾つものハードルがあります。まずは検討校になり、次に候補校になって、それからようやく認定校となります。この間、多くのチェックを受けます。カリキュラムはもちろんですが、組織運営や施設、教員研修など、多くの面で規定をクリアしないとなりません。また認定料を毎年支払うなど、資金面でも負担があります。

ここから小学校の話をしめます。PYP認定を受けている日本にある小学校は二十数校ありますが、その殆どはインターナショナルスクールです。いわゆる学習指導要領に則った一条校では、二校だけが今年認定されたようですが、それしかありません。

ん。日本の学習指導要領とPYPとの共存は、容易ではないのです。このことから、日本の小学校が全てIB認定校になることは、めざすところではないと思われまます。

教科横断型の学習の充実

しかしながら、PYPのよいところを教育の参考に取り入れることはできないのでしょうか。本校では、学習指導要領にIBのよさを取り入れた教育課程の研究開発にチャレンジしています。

PYPで本校が特に注目しているのが、「探究の単元」(Unit of Inquiry)です。これは教科横断型学習で、六つのテーマをもとに構成され、グローバル型の能力を系統的に育成するようになっていきます。

学習指導要領でも、教科横断的な学習の重要性がいわれています。実際には実践しづらいところがあるのではないのでしょうか。

なぜなら教科にはそれぞれ固有の学習系統があるため、教科を横断しようとしても、時期がずれたり、ふさわしい素材を見つけにくかったりして、継続的かつ系統的に積み重ねるには相当の教材研究と準備が必要だからです。

そこで本校では、思い切って社会

科、理科、生活科、総合的な学習の時間を発展的に統合し、グローバル型の学力を育成する新教科「探究科」の研究開発をしています。この新教科「探究科」の理念が、香港日本人学校の「グローバルスタディーズ」と類似しているのです。

選ばれる日本人学校に……

これまでの日本人学校は、海外に赴任する保護者に同行する児童・生徒が、日本の教育を受けられるようにということと設立され、運営されてきました。ところが今の時代、日本人学校よりも現地校やインターナショナルスクールに通わせることを選択する家庭も増えていきます。「折角、海外に赴任するのだから、その文化に浸る経験をさせたい」「これを機会に語学力を身につけさせたい」という考えなどからです。赴任先が英語圏の地域では特にこの傾向が強いようです。

このようなことから「日本人学校離れ」という状況が起きていて、日本人学校の抱える課題の一つです。

一方、現地校・インターナショナルスクールに通わせた方は、同時に不安も抱えます。「日本人の独特の間、人との距離の取り方を身につけられないのではないか」「学習に遅

れがでて日本に戻ったときに、ついていけないのではないか」といったことです。日本の学習指導要領は、海外と比べて内容はトップレベル、高度で充実しています。また日本人独特の「コミュニケーションの間」のようなものは、やはり日本人学校の方が育成できるといえるでしょう。

このことから、積極的に日本人学校を選択する方もいらっしゃると思います。ここに日本人学校を「選ばれる学校」に改革するニーズがあります。日本人学校で期待されるような例えば英語力を育成できれば、より支持されるようになっていくでしょう。

また海外にあるメリットを生かしてグローバル型の学力を育成することができれば、高度な教育力を持つ日本人学校のよさを活かしていきます。

グローバル型学力とグローバルスタディーズの可能性

日本人学校では、グローバル型学力を育成する学習開発が教育の重要な柱の一つになると考えます。

これからの社会は、グローバル化の進展、少子高齢化、AIの発展などで、予測不可能な時代が到来します。知識の暗記に頼った学力ではなく、課題について児童・生徒自らが主体的に探究し、違った考え方があ

っても仲間とともに力を合わせて協働し、新しいものを創造したり表現したりする力が求められていくのではないのでしょうか。知識偏重のコンテンツベースから資質・能力重視のコンピテンシーベースへの教育変革が求められます。

すると、教科の枠内にとらわれた学習だけでは不十分。教科の垣根を取り払い、例えば現代的な課題の正解のない問題について学ぶ場合、①いろいろな立場を知り、②それぞれを尊重しつつ、③論理的思考と汎用的なスキルを活用し、④広い視野をもって考え、⑤自分なりの「納得解」を見いだして、⑥表現や行動する、といった学習展開が望ましいでしょう。このような学習の中で育成される力が、グローバル型の学力ではないかと私は考えます。

現在の学習指導要領でグローバル教育を行うには、総合的な学習の時間を活用することになります。もちろんどの教科でもグローバルな視点を入れて展開できますが、「教科」である以上、最後は教科固有の目標に結びつけなくてはなりません。グローバルな学力を正面から育成するには、教科枠を取り払った総合的な学習の時間が必要になるでしょう。

では海外の日本人学校において、

総合的な学習の時間にはどのような実践がなされているでしょうか。どこも時数的にも苦しく工夫して取り組んでいらっしゃると思います。時数の一部を現地語学習とし、残りを現地理解教育として現地校との交流学習や、現地文化を理解する学習の時数として展開されていると思います。

それは価値のあることですが、ややイベント的になってしまふ点も課題としてよく聞かれます。本来なら単に現地への知識理解に留まらず、グローバルな視野で世界との繋がりにまで深まらせて考え、今後自分はどうに生きていくのか等、自分なりの「納得解」をつくる学習にしたいところもあるのではないのでしょうか。それが高度グローバル人材育成に繋がります。

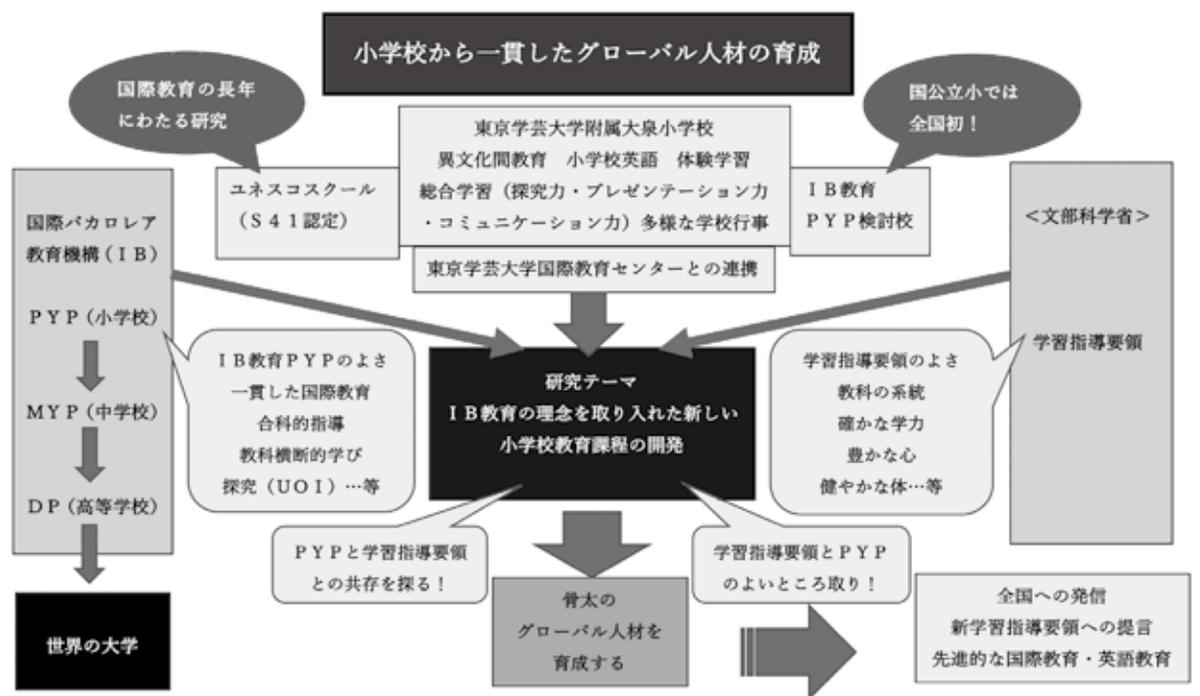
この深まりを生む部分は、日本国内にある学校では世界の文化に直接触れることが困難なので、机上の空論的な実践になってしまふことも少なくありません。しかし海外の日本人学校であれば、学校の中は「日本」ですが、一歩外に出ればそこは異国文化に溢れています。プラス面もマイナス面も実感をもって感じられると思います。より実感的に切実感を

もって、グローバルな視野で考え、発信していくことができるし、発信していくことができる。ここに海外にある日本人学校の取組ならではの強みがあると思われれます。

日本の学校が、国内で一生懸命に取り組んでも、とうていかなわないところではあります。ここを強みにして今後、日本人学校が充実したカリキュラムをもち、積極的に選ばれる学校として発展できるよう願います。

香港日本人学校のグローバルスタディーズは可能性を秘めていると思います。先日、授業を参観して参りましたが、「紛争」をテーマにした学習を開発していました。「紛争が他人ごとではないこと」「自分たちが普段からできることは何か」といったことまで考えさせる授業でした。授業展開や単元構成の検討をさらに重ねていくことで、日本でも、「実感をもって学ぶことができる」と可能性を感じました。

本校の探究科もまだスタートしたばかりで、手探りの状態です。ともに研究連携しながら、香港日本人学校のグローバルスタディーズのような、グローバル型の学力を育成する学習を開発し、世界の日本人学校のモデルとなるよう取り組んで参りたいと考えています。



ダラス補習授業校での実践と成果

ダラス補習授業校教諭 (AG5コーディネーター) 佐藤 恵美・バーバー悦子

本校がAG5「補習授業校における日本語能力向上のための総合的なプログラム開発」の研究提携校として歩み始めてから、はや1年が過ぎようとしています。現在、ダラス補習授業校の在籍者数は国際部含め、幼稚園から高等部まで全校で600名を超えようとしています。1年前と比べると約100名の増加です。これに伴い、子ども達の状況は更に多様化してきています。

教室内を見渡すと、数年後には日本に帰国する子ども達、長期滞在の子ども達、永住する子ども達と、様々な背景を持ち、かつ日本語の習熟度には違いがあります。しかし、「日本語を伸ばし、日本語で学力を向上させたい」という願いは皆同じです。



佐藤 恵美



バーバー悦子

AG5の補習校プロジェクト チーム(以下、AG5チーム) とダラス補習授業校の出会い

実際に本校の現場に目を向けると、「身に付けている日本語力」が異なり、なおかつ将来「必要とされる日本語力」(目指すレベル)が異なる子ども達が一つの教室で同じ教科書を使って授業を進めていくことには様々な困難や課題がつきまといまふ。これらは補習校で指導されている多くの教師にとって、またそこで学んでいる子ども達にとっても共通の悩みであり課題でしょう。

このような状況下にあっても学び続ける子ども達を目の前に、どうしたら補習校で効果的な指導が出来るのか。多くの教師が、そんなさまざまな思いを抱えたまま毎週の授業を進める中で、本校はAG5の補習校プロジェクトと出会うことになりました。あれから一年が経ち、今まさに、ダラス補習授業校はカリキュラム変革の時を迎えようとしています。

一年間の流れ

① AG5チームが本校を訪問 (二〇一七年十一月)

本校におけるプロジェクト授業実施に際し、学習活動計画書の作成、学習指導の助言等のサポートをしてく

ださるAG5チームの五名の先生方と初めて出会ったのがこの時でした。まずは、本校の全教職員を対象にAG5全般と補習校プロジェクトの概要および、新学習指導要領の内容や今後の日本の教育界の目指すところ等を説明していただきました。そして、新学習指導要領で求められている「主体的・対話的で深い学び」のためのアクティブラーニングの一つとして「ジグソー法」(各々の学びを持ち寄り全体像を浮かび上げながらしていく協同学習)を体験しました。

講師をされた方のテンポ良い指導に感銘を受けたと同時に「こんな指導方法もあるのか」と感動を覚えたことを鮮明に覚えています。更に、「子ども主体の授業」に活用できるデジタル教科書のデモンストレーションも見学しました。これを機に本校でも国語と社会のデジタル教科書を導入しました。

② 小学部四年での「社会と国語の合科授業」実践(二七年十二月〜一八年一月)
教科学習を通して日本語力の向上も図る「教科と日本語の統合学習」の考えで計画を作りました。

本校では毎週一時間、社会科の授業が組まれています。従来は一斉授業で、教師が教科書の内容を説明し

たり、子ども達はその内の重要事項を覚えたりと、教師主導の一方的な授業形態が主流でした。

今回の社会と国語の合科授業では、子ども達が主体的に活動できる場面を設定しました。まず、社会科学習では、グループごとに都道府県についてのクイズを出し合ったり、ダラスや以前に自分が住んでいた場所について話し合ったりしました。子ども達は本来、クイズや自分について話すことが大好きであり、クラス全員の前で発表するのではなく、グループ内で話す方が緊張なく出来るので、意欲的に交流が進みました。

次に、自ら選んだ調べ学習の成果を持ち寄り、ジグソー法的にグループ内で発表しました。自分の持つ情報が他の人と繋がることで、更に知識や理解が広がり、深まりました。最後は、グループで問題を作りクイズ大会をしました。子ども達はそれぞれに頭をひねりながら問題を作り、クイズに積極的に答えようとしていました。このように、毎回の授業で子ども達主体の活発な思考活動や言語活動が繰り広げられました。

国語科学習では、社会科で調べて分かったことを報告書に書き、ポスターにまとめて発信する活動(ポスターセッション)に発展させました。



積極的に活動する子ども達

「書く」課題を支援する語彙や文型が示されたワークシートで、何を書けばよいか明確になり、日頃は日本語で書くことに苦労をしている子ども達も書きやすかったようです。ポスターセッションでは、子ども達は初め多少緊張していましたが、何度も話しているうちに慣れてきて、練習を重ねるごとに発話量が増えて良かったと思います。自ら興味関心を持ったことを調べ、伝えたいことを工夫して示したポスターはそれぞれ個性が出ていて、とても変化に富んでいました。そして、発表を通して交流することでポスター内容だけでなく、お互いを理解することに

も繋がっていききました。

今回の合科授業では、子ども達は一貫して主体的に楽しそうに授業に臨んでいました。なかなか書くことが決まらなかつたり、どう書いていいか分からなかつたりした時は、グループ内で協力し合う様子も多く見られました。

調べ学習に対して子ども達からは、「みんな同じことを調べていると思つたら違つて面白かつた」、「このような学習活動を「また、やってみよう」などの声が上がっていました。今回は保護者の方々の協力も得られました。ポスターセッションに際しては、家庭で発表の練習をしてもらつたり、発表時には、オーディエンスになってそれぞれの発表を聞いて発表者の子ども達に質問を投げかけたりなどしていただきました。

今回は補習校プロジェクトの授業を実践する機会を得て、自分一人ではなかなか思いつかない新しい授業形態を実践できただけでなく、同僚の教師達の支援を得て試みる事ができて良かったと思います。

③ダラス補習校授業教員の日本研修 (一八年一月)

AG5プロジェクトの一環として、本校教員が日本で研修を受ける機会を得ることが出来ました。日頃、指

導に関する様々な課題を抱えていても、他の補習校はおろか、同じ補習校内でも互いに学び合うことが難しい中、日本の学校現場で実際に授業見学が出来る研修は大変貴重なものとなりました。

見学先は、帰国子女教育に力を入れている学校や、アクティブラーニングの授業や最先端のIT機器を活用した授業を実践している学校でしたので、今後に向けて多くの収穫がありました。

今回の学校訪問を通して、未来の「グローバル人材」として帰国生への期待度が高くなり高いことが分かりました。受け入れ校では、帰国生を国内生と比べ、「しっかり考えられると出来る」(現地校でも鍛えられている)、「自分の意見がしっかりと見える」(積極性があり、自分の意見を発表することに慣れている)、「リーダーシップ性に優れている」(主体的に動ける)と評価しています。

補習校の外に出ることで、普段はつい見過ごしてしまいがちな補習校の子ども達の素晴らしさに改めて気付くことができました。子ども達あってこそその教師です。これからも希望と可能性に満ちた子ども達の指導に今まで以上に邁進していくことを心に誓い研修を終えました。

④岡村郁子氏講演会(一八年六月)

多くの保護者の方々が、様々な悩みを抱えながら海外で子育てをしています。AG5チームの岡村郁子氏(首都大学東京准教授)の講演会はそういった保護者にとって、まさに「知りたかつた情報」が得られる貴重な機会となりました。以下、参加した方々の感想を紹介します。

・ダラス補習校の先生方はAG5プロジェクトに率先して協力されていて素晴らしいと思います。駐在員の立場からすると、帰国子女枠での入学が出来たとしてもその後、日本語の授業についていけるかどうかの心配が尽きません。子ども自身が日本に興味があれば、自然と日本語を聞く機会は増えますが、家族間の会話だけではそれほど語彙が増えていかないのが現状です。下の子は英語が強いので、今から思うと幼い頃から「家庭では日本語のみ」をもっと徹底すべきだったと感じます。岡村先生の話聞き、これからは「日本語に直して話す」を子どもにも根気強く働きかけていこうと思います。週に一度しかない補習校ですが、そこできしか会えない友だちがたくさんいますし、楽しく勉強できている環境があることを嬉しく思っています。

・岡村先生の講演会を聞き、日本の

学生の現状（世界的比較における語学力の低さ、留学生の減少など）が、想像以上であったので驚きました。ネット社会が進む一方で、日本国内における英語教育の難しさが依然としてあることも分かりました。また今回、政府をあげてグローバル人材育成の対策を行っていることも知り、その取り組みが今後もっともっと広がっていくことを望みます。帰国生を持つ親としては、日々遅れてしまうところですが、しかしこれからは帰国生が持つ素晴らしさにも目を向け、その良さを本人にも意識させ、自己肯定感を高めることが大切だと改めて思いました。その意味でも補習校は、帰国生の持つ素晴らしさにより磨きをかけ、帰国生としての意識を高めるためにもとても大切な場所だと感じました。

⑤ 合同研究会（一八年八月）

「多様な児童生徒と一緒に楽しく日本語を学ぶ授業づくり」補習校ネットワークを力に「」を主題に掲げ、協力校の先生方と本校の教師達で研究会を実施しました。

日本からは、AG5チームの渋谷（真樹氏（奈良教育大学教授）と同じく今澤悌氏（甲府市立大岡小学校教



真剣に研修に臨む参加者達

諭）を講師として迎え、講演をしていただきました。また、参加者達もアクティブラーニングを体感するということで、「授業力向上ワークショップ」も実施されました。

初めての試みでしたが、会場からは「他校の先生からアドバイスをいただき、色々な悩みを解決する助けになった」「研修の機会が少ないので、このような合同研究会は刺激を得て意欲がわいてくる。とても勉強になり充実感でいっぱい」「このような会が定期的に出来たら良いと思う」「補習校同士の繋がり（指導案）など、フェイスブックでもっと盛んに交流できると嬉しい」等、今後も他校の先生方と繋がる場が増えていくことを希望する声が多く聞かれました。

この会を機に同じ志を持った先生方が各地に広がり、補習校のネットワークが広がっていくことが期待されます。

二〇一八年プロジェクト授業

昨年度は小学部四年のみで実施したAG5プロジェクトの授業ですが、今年度は小学部四年に加え、五年、六年の三学年に広がりました。この授業実践により、今までは行われていなかったアクティブラーニングやジグソー法、ポスターセッション方式の発表会など、「子どもを主体にした」授業法に挑戦しています。これらの手法は、異なる学年や単元にも活用可能ですので、今後、校内に広げていくことを目指します。

今年度は、昨年度に比べ教師間でもAG5プロジェクトの理解が深まってきました。初めてアクティブラーニングを取り入れた教師は、「こういう授業の仕方もあるのか」と驚きと新鮮な思いを持ったそうです。また子ども達も楽しそうで、今後の新しいスタイルの授業へと繋がる手ごたえも感じているとのことでした。

二〇一八年学年研究会

AG5チームと協力校から先生方をお招きして、プロジェクト授業の

実践と授業見学、そして事後研究会を、今後も本校で実施します。

協力校から参加された先生方と有意義な研究の場を共有することが出来た八月の合同研究会に引き続き、秋冬に行われる学年研究会でも、より一層、現場の授業に役立つ指導法やアイデアの共有が可能となることが期待されます。

主催校である本校を発信元として、より多くの補習校の先生方と、未来を担う子ども達の教育に取り組みでいけたらと考えています。今まさに補習校の輪が少しずつ、しかし着実に広がるうとしています。

おわりに

この一年間、一步一步出来ることを進めてきた結果、私たちダラス補習授業校での実践とAG5の補習校プロジェクトの軌跡が確実に重なり合い、力となっていることを感じています。これは、現在、二年目の取り組みを進めていくうえで原動力となっているのと同時に、今後のAG5のプロジェクト展開への希望に繋がっています。

今後もより多くの協力校の先生方と繋がりをもち、「すべての補習校で学ぶ子ども達」のためになるよう歩みを進めていきます。

エー A ジー G5 ファイブ だよ

グローバルクラスの3年目—児童と創る Global Studies—

香港日本人学校香港校グローバルクラスコーディネーター 大澤由恵



3年目を迎えたグローバルクラス(GC)、第1期生は6年生になりました。10月現在4年生20名、5年生14名、6年生12名が在籍し、英語ネイティブ教員と日本人教員8名が指導にあたっています。本クラスの特徴は、日本の学習指導要領を基にしながらい国際バカロレア(IB)の「多様な文化の理解と尊重の精神を通して、よりよい平和な世界を築くことに貢献する探究心、知識、思いやりに富んだ人材の育成」という理念等を取り入れ、これから生きる「グローバル人材」を育成しようというところにあります。現在、「日本人学校における高度グローバル人材の基礎的資質形成のプログラム開発」のモデル校としてAG5のサポートを受け、カリキュラムの開発と改善に努めています。今回は、GCで行っている新科目「グローバルスタディーズ」(GS)とはどんな科目か、児童にはどんな成長が見られているかを中心にお伝えします。

グローバルクラス(GC)とは

人やモノの移動が激しく、情報が錯綜し、技術発展も目覚ましい近年において、かつては想定もしなかった問題・課題や価値観が次々に生まれるようになりました。日々いろいろな場面で「グローバル」という言葉があふれかえっています。

それでは、このようなグローバル社会をよりよく生きるためにどのような人材が求められるのでしょうか？そして、小学校段階でどのような基礎的な資質を育成すべきなのでしょう？

GCが育てたい児童像は、「グローバル社会で通用する英語コミュニケーション能力」、「分析力やプレゼンテーション能力、調査力、課題解決力などの二十一世紀に必要なグローバルスキル」、「グローバル市民としての主体性」です。そのために、英語イマージョン教育を行ったり、グローバルスタディーズ(GS)を設けたり、SAP活動(Student Action Project)を行ったりしています。

英語教育に関しては、児童の英語力にも大きな成長が見られています。例えば、本コースで導入しているオンライン英語教材「Eready」で計測された英語の読む力(Lexile Level)の

成長率は、二〇一七年四月と一八年四月の同児童グループのテスト結果を見ると、平均で二九〇ポイントの増加が見られます。これは、アメリカの同年代の子どもの成長が平均一〇〇ポイント増であることを考えると、高い成長率を出していると言えるでしょう。

また英語イマージョンで学習している算数と理科については、英語で学習しているからといって学力低下が見られるということもなく、全国テストの平均よりも高い数値が出ています。プレゼンテーション会場にネイティブの先生が来られた時には、日本語で書かれた成果物も英語で伝えようとする姿も多く見られます。

グローバルスタディーズ(GS)とは

グローバル人材の基礎的な資質を育成するための新科目「GS」の創設にあたって、まずはこの科目を通して子どもたちにどのような人になっほしいか、グローバル人材の姿について再考することから始めました。個人的には以下のような人がグローバル人材であり、そうなるための第一歩をGSで踏み出すことができればと考えています。

○生涯にわたって学習し平和構築に貢献する人

- ・考え・信念を公正な行動に移せる。
- ・情報を取捨選択し自分の考えを構成できる。
- ・多様な見方を理解し受け入れられる。
- ・異文化に楽しんで適応できる。

「平和構築」とはいつても、武力紛争地帯での和平合意に取り組みといった、いわゆる大層なものばかりではありません。子どもたちが大人になるころには、人やモノの行き来、これまでに出会ったことのない問題や課題の発生といった現象が昨今の比ではないでしょう。そのような社会では、自分の経験や先入観に固執せず柔軟に思考し、行動できる人が必要です。異なる文化をもつ人々と議論しながらも折衷案を探したり、新しいアイデアを見つけたたりすることができる人。さまざまな情報や見方を理解しながらも、自分が思うことを表現したり行動に移したりできる人。状況が「平和」的になるように物事の公正な解決策を探し、実行していける人が求められるのではないのでしょうか。GSはそのような「人」を育てるために、GCが独自に創設した科目です。

①どんな授業にするのか？

国際バカロレア(1B)と教科横断

このような資質を身につける中心教科として、小学校段階でどのような探究活動ができるか、どのような機会を与えるべきかというふうに考えながらカリキュラム開発を進めていきます。

まずはテーマについて。GSでは以下のように、一学期に一テーマ、三学期を通して八つのテーマ+自由研究を行います。

〈四年生〉

一学期 多様性

二学期 限られた資源としての水

三学期 探検と新たな発見

〈五年生〉

一学期 環境と持続可能社会

二学期 イノベーションテクノロジー

三学期 ジーとその影響

メディアが人々に与える影響

〈六年生〉

一学期 紛争と平和構築

二学期 ガバナンスと人々の暮らし

三学期 自由研究発表

このテーマと内容の選定にあたっては、育てたい児童像、伸ばしたいスキル、子どもの年齢、社会科を中

心とした他教科との関連性、香港の地で得られる資料や校外学習先、1Bのカリキュラム、国際問題、持続可能な開発目標(SDGs)、世界的な開発教育(EDD)のトレンドなどを考慮して決めました。1Bの探究学習や概念学習についても含め、AG5の先生方からのアドバイスや、AG5の支援で行われた日本での研修により、着実に成果が生まれつつあります。

他教科との横断では、例えば四年生の「水」の単元で蒸発や蒸留、ろ過などの理科的な実験をしたり、水使用量について計算を含む数学的な調査や図表処理などを取り入れたり、水の使用量を測りながらの調理をしてみたりしました。トピックがGSと関連しなくても、GSで考えたより説得力のある論の立て方を国語の意見文に反映してみることもありま

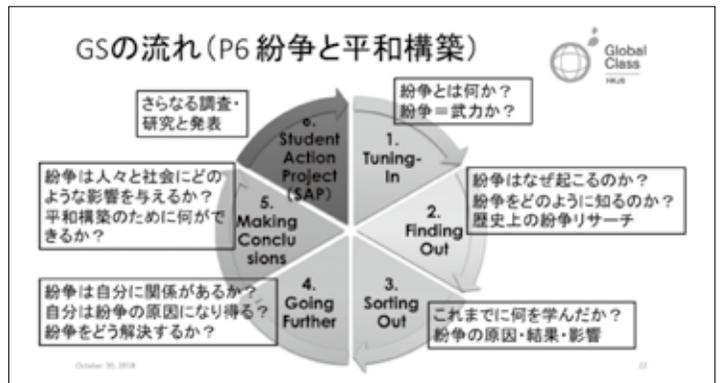
る機会をもてるように意識しています。

②みんな授業にしているのか？
みんな楽しんで探究

一学期に一テーマを突き詰めていくわけですが、基本的に六つのステージを踏んでいきます。最後のステージはSAP活動で、学んでいたことを他の人に向けて発信したり、自分の行動に還元したりしていきます。これまでに、多様性に関する劇を作成して披露したり、節水プロジェクトを家で実践したりしてきました。

学びにあたって、ゴールにたどり着くためのルートは一つに絞られるべきではありません。もちろん子どもたちの様子を想像して授業を計画し、目標に到達するためのレールを敷いてみますが、子どもたちがそれは違う方向に行くこともしばしばあります。予想を外れて自分で学びを進めようとしてくれるのはうれしいことです。何より子どもたちが楽しんで探究することが一番です。

子どもたちの探究のために使用する教材は多岐にわたります。GSに教科書はないため、面白いデータやトピックを政府や国際機関、NGOなどのホームページ、本、DVD、新聞から集めてきます。



探究サイクルと流れの例

また、教室では「みんながいるからできることをする」という点を大切にしています。そのため、自分のアイディアを書いたり、ブレインストーミングをしたりするのは宿題になることが多々あります。

お互いの考えを共有したうえで、ディスカッションをしたり、グループ調査をしたりする等の活動を通して協働スキルもどんどん伸ばしてほしいと思っています。

(3) どんな授業にするのか？ ——日本語と英語で

GSはその日の内容によって日本語と英語を使い分けるバイリンガル科目です。英語を使用するときは、「英語」を「学ぶのではなく、英語」で「国際的な課題について探究すること、英語」でも「主体的に学びに向かうことを強調しています。そのため、文法やスペリング、発音の多少の乱れは気にしません。英語はツールであり、何とかして自分の考えを伝える、うまく言えないのであれば同じ意味の違う単語で説明するといった姿勢を大切にしています。

児童の成長

先日、香港日本人学校小学部・小学部合同の教員研修会が開かれ、六年生のGS「ガバナンスと人々の暮らし」を公開しました。小学部の別キャンパスである大埔校、そして中学部の先生方からは子どもたちのディベートの様子を見て、臆することなく知識を基に意見を発表する姿や、これまで積み上げてきた学びの成果について驚きの声が聞かれました。子どもたちはGSを楽しんでいる様子で、「たくさん考えるのが好き」や「苦手だったプレゼンが面白くな

った」、「GSは知らなかったことはもちろん、考えようとしなかったことについて学べる」という感想が挙がります。主観的にはありませんが、現六年生とは四年生のGC開設時からの付き合いで、彼らの成長には驚かされることばかりです。例えば自分の思考について振り返り、「最初を考えていたことは、一つの面しか見ていなかった。他の見方があった」と、新たな切り口で物事を見られるようになったことを実感している子どもいます。また、いい意味で目立ちたがり屋になった彼らからは「劇をしたい」、「大きい場所でのプレゼンしたい」、「ビデオや番組を作りたい」という発言が多く聞かれます。

今後の課題

現在、AG5の支援を受けて奮闘中ですが、GCにはさまざまな課題を感じています。

まず、GSと他教科との横断性という点で大きな課題が残ります。GSを核にしていますが、十分な横断性があり、子どもたちが知識や概念をいろいろな場面で応用しさらに構築していけるか、この環境を整備できているのかというところは常に振り返っていかねばなりません。そ

して、GCは計八名の教員が関わり、教科担任制の部分もあるため、教員間の連携が重要な鍵になります。

四年生から六年生までの三学年の中での交流や、現地校・インターナショナルスクールとの交流活動にも力を入れていきたいところです。これまで六年生が四年生に向けてGCの目指す学習者像について説明したり、五年生が四年生に向けて何かを教えたり、プレゼンテーションに他学年を招待したりという関わりをもってきました。子どもたちの様子を見てみると、このような交流を通して責任感や自信、意欲を高めたり近い将来への目標をもったりというポジティブな姿が見られました。このようなグローバルクラス内での交



紛争と環境を結び付けた調査について5年生に発表する6年生の児童

流機会を増やしていくとともに、現地校やインターナショナルスクールとの交流をもてるように、渉外面にも努めていきたいと思えます。

教員は指導力向上に、常に努めていかなければなりません。学習指導要領はもちろんのこと、IBの教育についての理解を深め、探究学習を進めるための指導方法について研鑽を積むことが求められます。グローバルクラスの教員内で自主的に行う授業研究も始めました。研究会の持ち方や進め方についてすらも未だ模索しながらではありますが、より子どもが楽しく探究できる授業のために授業研究を進めていきます。

持続的な運営という点も注視していかなければなりません。数年ごとに教員が変わっていく在外教育施設という環境下で、どの教員が担当してもGCとしての特色を打ち出せるようにするために、運営やカリキュラム構築・見直しについて多くの人が関わっていくことが大切になると思えます。

これらの課題に対して、試行錯誤を繰り返しながら改善に努めていきたいと思えます。また、児童と保護者の声を大切に、GSそしてGCのさらなる発展に向けて一緒に歩んでいきたいです。

現地小学校の児童への日本語指導と交流活動

高雄日本人学校長 高橋友幸



台湾にある高雄日本人学校は、台北・台中日本人学校とともにAG5プロジェクトに取り組んで2年目となります。本校では、現地校である中正國民小學（以下、「中正國小」）の中で開校しているという特色を活かし、中正國小と様々な交流活動を行っています。その中核となっているのが、本校の教員が中正國小の児童へ日本語指導を、逆に中正國小の教員が本校の児童生徒へ中国語指導を、相互に行っていることです。このような交流を通して、本校の児童生徒はもちろん、中正國小の児童も将来のグローバル人材として、ともに成長していくてくれることを期待しています。

高雄はもともと親日的な土地柄ですが、本校が行っている交流活動によって、本校の児童生徒や教職員はもとより、日本人や日本に理解を示してくれる台湾の方々との輪は、少しずつですが確実に広がってきています。

中正國小の校内へ移転した経緯

本校は、昭和四十四年に開校し、次年度で開校五十年を迎える歴史のある日本人学校です。

本校の児童生徒数は、昭和六十三年の二六六名を最高に、その後徐々に減少し、ここ数年は一〇〇名前後で推移しています。かつては独自の校舎で教育活動を行っていた本校でしたが、校舎の老朽化と児童生徒数減少に伴う財政状況の悪化によって校舎を維持できなくなり、平成二十六年九月に現在の、現地校である中正國小校舎の棟「信義樓」を借り受け移転しました。

一方、中正國小は過去最高で約五〇〇〇人の児童が在籍していましたが、台湾でも少子化は著しく現在の児童数は一四〇〇人程度にまで減少してきています。そのため空き教室が数多くあり、本校と賃貸借契約を結ぶことは意味のあることでした。

現地校の中で学校経営を行う工夫

中正國小には、地下一階から地上四階までの五階建ての校舎が五棟あり、その四棟目の「信義樓」を本校が借用しています。

一般的に日本人学校は、高い塀やフェンスで学校を囲い、侵入者を防

いで児童生徒の安全を確保しますが、中正國小の校舎五棟は全て、一階から四階まで通路でつながっていて、誰でも自由に行き来できる構造になっています。

また現地消防法の関係で、本校の棟だけを扉やフェンスで仕切り、独立した空間として囲うことができなかったため、児童生徒の安全管理の考え方を根本的に変える必要がありました。

本校児童生徒の安全管理にかかわる基本的な考え方は、高雄日本人学校を「開く」ことにより、その安全を確保するというものです。

中正國小の児童や教職員と同一の校舎の中で仲良く生活し、中正國小の児童や教職員、保護者の方々に本校の存在や本校の児童生徒、教職員をよく知ってもらい、多くの目で見てもらうことによって本校児童生徒の安全を確保してきました。そのため、次のような活動を継続して行っています。

① 中正國小児童への日本語指導

中正國小五・六年生に対して日本語指導を実施しています。本校への理解を深めることはもちろん、日本語や日本文化についての興味関心を喚起することができます。

② 本校の児童生徒への中国語指導

中正國小より四名の中国語講師を派遣してもらい、本校雇用の中国語講師とともに中国語指導を行っています。

③ 朝の「あいさつタッチ運動」

登校時は本校の児童生徒の安全を確保するため、本校の教員は全員、歩道及び校門周辺で立哨指導をしています。その時、本校の児童生徒だけでなく、同じ校門から登校してくる中正國小の児童とも分け隔てなく「あいさつタッチ運動」を行っています。挨拶は中国語の「ザオ（早）」と日本語の「お早う」を両方使いながら行っています。

④ 交流活動の実施

毎年十一月に中正國小と本校小学部の各学年がお互いに自己紹介し合うなどの交流活動を行い、児童同士



朝のあいさつタッチ運動

が直接触れあう機会を設けています。
⑤毎週の事務調整会議の開催

両校の教育活動が問題なく円滑に遂行されるためには、体育施設の使用や学校行事の調整など、詳細な確認を行う必要があります。

毎週月曜日に本校からは校長、教頭、教務と通訳の四名、中正國小からは校長のほか、総務、教務、学務、生徒指導、事務の各主任が集い、調整会議を行っています。

⑥文化交流会

両校の教員同士が顔見知りになり相互理解を深めるため、勤務時間終了後に年四回程度、おでん作りや餃子作り体験及び試食会などを持ち回りで開いています。

中正國小の新生保護者説明会において、本校の存在を新生の保護者に知ってもらうとともに、両校が仲良く生活する必要性を理解してもらうため、本校校長の中国語による挨拶を五年間続けてきました。

このような活動を継続してきたことにより、本校の存在は中正國小の保護者の方以外にも広く周知され、地域の方々にも受け入れられるようになってきました。現在、本校及び児童生徒や教職員に対してとても温かい視線が向けられています。

中正國小への日本語指導

①日本語指導の実態

中正國小児童への日本語指導は九月から十二月にかけて、五・六年生を対象に一クラスあたり三時間、両学年とも十クラスあるため合計六十時間行っています。なお、自己紹介や挨拶を大切にして良好な関係作りに普段から努めています。

日本語指導の内容は、この四年間をかけて精選してきました。現在では、誰が担当しても同じ内容の指導ができるように、両学年とも各三時間分の指導略案や児童用ワークシート、パワーポイントスライドが作成されています。現在、AG5では、現場のニーズを確認しながら指導の充実を図るため、これらの教材の内



日本語指導の様子

容を精査する支援を始めました。

主な指導内容としては、五年生の

一時間目「名札作りとあいさつ」、二時間目「じゃんけん、これだれの」、三時間目「知ってる知らない、好き嫌い」、六年生の一時間目「名札作りとあいさつ、くが好きです」、二時間目「これ、あれ+形容詞の表現」、三時間目「いくらですか」となっています。子どもたちが興味を持つ日本のアニメや食べ物、ゲーム等を活用したり、名前を日本語読みで呼び合ったりするなど、日本語に親しみを持つよう工夫しています。

中正國小は学級数が多く、学級配置が複雑であるため、授業開始前に中正國小の児童が本校の職員室まで迎えに来てくれます。また授業中は中正國小の学級担任が教室内において、分からないことが生じた時や児童の反応が思わしくない時などにサポートをしてくれます。

日本語の授業を楽しみにしている子どもは多く、「日本人がただの外人でなくなつた」「ますます日本が好きになつた」「もっと日本語を勉強したい」「将来、日本に行きたい」等の感想が寄せられています。また指導している教員からは「台湾の授業スタイルや中国語の発音等、学ぶことが多い」「教師としてのスキル、

キャリアアップにつながっている」等の声が上がっています。

②派遣教員の中国語習得

中正國小への日本語指導は、赴任二年目及び三年目の派遣教員が行っています。

中正國小の児童に日本語指導を行うためには、必要最低限の中国語の習得が不可欠です。そのため、赴任一年目と二年目の派遣教員は、日本語指導や毎日の生活が滞りないよう中国語の習得に励んでいます。

校務終了後に週二回程度、語学学校に通い、赴任一年目の終了時にはほとんどの教員が日常生活に必要最低限の中国語を習得し、中正國小での日本語指導に活かしています。

③中正國小の教育課程上の位置づけ
日本の学習指導要領にあたる台湾の「國民中小九年一貫課程綱要総綱」は表のようになっています。

「節数」は時数、「学習総節数」は総授業時数、「領域学習節数」は教科授業時数、「弾性学習節数」は学校が独自に教育内容を決めて実施する時数を意味しています。

日本よりも授業時数や教育内容ともに学校裁量の幅が大きく、中正國小では小学四年生以上で、「弾性」の時間を活用し、英才教育に準じた教育を行っています。一組から六組は

年級	節数	学習総節数	領域学習節数	弾性学習節数
一	22-24	20	20	2-4
二	22-24	20	20	2-4
三	28-31	25	25	3-6
四	28-31	25	25	3-6
五	30-33	27	27	3-6
六	30-33	27	27	3-6
七	32-34	28	28	4-6
八	32-34	28	28	4-6
九	33-35	30	30	3-5

台湾の教育時数

普通クラスですが、七組は吹奏楽クラス、八組は古典楽器クラス、九組は舞踏クラス、十組は野球クラスとして教育課程を組み、本校が行う日本語指導は、「弾性学習節数」の一部として取り扱われています。

中正國小から本校への中国語指導

本校の中国語の授業は、指導要領に示された時間以外の時間として、小一で週二時間、小二から中三は週一時間実施しています。

小一と小二は、初級と中級の二コース、小三から中三は初級、中級、上級の三コース実施しています。本校では中国語の講師を二名雇用していますが、三コース開設するには一名不足します。そこで、小三から小六

までの上級コースに中正國小より中国語の先生に来ていただいています。中学部は内容も高度になるので、語学学校より講師を派遣してもらっています。中正國小には、「志工團」というボランティア登録制度があり、退職校長や退職教員が多く登録しています。本校の中国語の先生は、この「志工團」より四名派遣してもらい、各自一週間に一時間の中国語を担当していただいています。

中正國小より派遣していただいている中国語の先生は、年間を通して本校の授業を担当してくださる方もいますが、年度途中で別の先生に替わる場合もあり、指導の一貫性という面では多少課題もあります。

学んでいる子どもたちからは「劇やゲームもあって楽しい」「生活に役立つ」「台湾の教科書が興味深い」等の感想が寄せられています。

今後の展望と課題

①今までの取組の成果

本校の児童生徒は中国語の授業だけでなく、日常的に中正國小児童などから中国語を聞いているため、かなり高い中国語能力を持っています。また、毎日台湾人の児童や教職員とともに同一校舎内で生活しているため、台湾人の人々が身近にいて当

り前という感覚を持っています。

本校の児童生徒は、グローバル人材として成長していく基礎を既に十分備えているといえます。中正國小でも中国語の朝の挨拶「ザオ(早)」以外に、「お早う」と日本語で挨拶する児童も確実に増えており、中正國小教職員や保護者、地域の方々の温かな視線は確実に増えてきています。

本校が中正國小の中にあることや本校が日本語指導を行っていることによる効果は、小さなものであるかもしれませんが、日本人や日本に理解を示してくれる台湾の方々の増やすことに確実に役立っています。

②今後の高雄日本人学校

高雄に進出している日系企業は、機械や金属といった重工業が中心で、新しい企業の進出はあまり望めません。さらに、台湾新幹線が開通して、台北ー高雄間が一時間三十分で結ばれたことから、駐在員を台北に集約し、出張ベースで高雄に来るという傾向が強まっています。

今後、当地の企業駐在員が減ることとはあっても、大幅に増加することは考えにくいことから、本校は今後、現在の中正國小内で学校を維持していくことになる予想されます。

③交流活動継続の必要性

中正國小内で開校して五年目に入

りました。大きな事故等はなく、両校の教育活動も特に問題なく安定して行われています。

中正國小の児童や教職員、保護者はもちろん、地域の方々にも、高雄日本人学校が中正國小内にあって当たり前、日本人が身近にいて当たり前という認識が定着してきました。

今後とも、日本語及び中国語の相互指導や各学年の児童の交流活動、朝の「あいさつタッチ運動」など、今まで継続してきた活動を続けていかなければならないと考えています。

④課題

中正國小内での本校の学校運営は、特に問題なく行われていますが、問題が少ないが故に、先輩の派遣教員の熱意によって続けられてきた交流活動がマンネリ化しないように十分に注意していかなければなりません。また、重要な交流活動の柱である中正國小への日本語指導は、派遣教員個人の中国語習得の努力や個人の費用負担によって支えられています。

AG5では、運営委員会と打ち合わせ、現在の取組が校務として位置づけられ、中正國小及び高雄日本人学校両校の教員・児童生徒のグローバル化につながるよう、高雄日本人学校のために具体的な支援策を検討していきたいと考えています。

エー
A
ジー
G
ファイブ
5
だよ

現地の日本語学校・日系人社会への支援

アスンシオン日本人学校 校長 加藤雅亮

パラグアイの日系移民は、スタートこそ1936年ですが、その後は戦後の移民が多く、比較的新しい移民の地であると言えます。そのため、移民一世の方もいます。当時は様々な苦勞があったようですが、先人たちのたいへんな努力により、パラグアイでは日本人が敬意をもたれています。「日本人は口約束でも金を払う」「今まで日本人はパラグアイで人殺しを一度もしていない」という表現で、日本人への信頼を表すパラグアイ人もいます。そのような環境のなかで、本校は「日本文化の発信拠点」として、現地の地域社会に貢献できる存在になることを目指しています。



パラグアイの日系人社会

パラグアイの日系移民の大きな特徴は、日系人同士の結婚が多く、子どもたちが生活の中で日本文化に接したり日本語を話したりする環境がまだある、ということです。

国内には六つの移住地と三つの都市に、日本人会が支援する日本語学校が計九校あり、それぞれの地区で日本語や日本文化の継承に尽力しています。そのためパラグアイでは、他の南米の国々に比べて高い日本語力が維持されていると聞きます。

しかし、日系四世が誕生し始めている昨今では、その将来を不安視する方もいます。子どもたちは親とは日本語で話しても、日常の主たる言語はスペイン語となり、思考の根幹をなす言語(母語)がスペイン語である子どもたちも少なくありません。すでに「日本人」という意識よりも「日系パラグアイ人」という気持ちの方が強くなっています。

そうした中、「五世以降で日本語が途絶えてしまうのなら、今、必死に日本語を継承しようとする意味はあるのか」と悩みながら、それでも若者たちへ継承しようとする努力されている方の声も聞きました。日本語や日本文化の継承および日本型教育の

発信・普及は、日本への理解者・応援者を増やすことにもなり、日本にとっても有意義なことです。ここに私たち日本人学校が彼らを支援するべき理由があります。

日系日本人会による日本語の作文コンクールやスピーチコンテストの審査員を、私は立場上、依頼されます。スピーチコンテストでは、パラグアイ全土から代表の児童生徒が集まってきました。その表現は豊かであり、たいへん丁寧な日本語です。またスピーチの内容は、日本人の若者と変わらない気持ち表現しているものもあれば、日本の若者よりもずっと素直な感性ではないかと思わせられるものもあります。

一方、日本人とは異なる感覚の中で生活していることを感じさせるものもありました。一例を挙げます。ある地方に住む女子中学生は「スマホがほしい」と思っていました。日本の中学生と同じです。しかし父親からプレゼントされたのは「バイク」。ちょっとがっかりしながらも、感謝する気持ちをスピーチで話しました。「これで農業を行う父親の仕事の手を止めさせずに、自分一人で学校へ行ける」と。こちらでも中学生は法的にはバイクは乗れません。しかし地方では許容されているよう

です。生活の足として必要なのです。こうした話からも、日本とは異なる文化の中で育っている日系の子どもたちの様子が感じられます。

アスンシオンにおける
AG5の在り方

二〇一七年度より、本校はAG5の研究提携校となりました。テーマは「日本文化発信の拠点形成プログラム開発」。その具体的な取り組みとしては、「日系人とその生活拠点であるコミュニティに対して日本型教育や日本文化を発信すること」であります。以前から現地の日系人社会と交流のあった本校ですが、この機会を与えていただいたことは、小規模の本校がさらに現地にとって必要な存在となり得るチャンスです。

本校は、現地校であるカンポベルデ校と交流を行っています。本年度も九月に二日間にわたって交流の機会をもちました。ここでは、日本の昔の遊びや浴衣を着る体験、日本の授業体験や習字体験などの場を設定しながら、日本文化の発信をしました。しかし本プロジェクトで行うべき「日本文化の発信」は、少し違うものであるべきだと考えます。

昨年度の本校における話し合いでは、日本の「教育文化(授業研究等)」

や「学校文化（規律・清掃活動等を含む）」こそ、発信すべき「日本文化」ではないか、という結論に至っていません。

今までも本校の運動会では、アスシオン日本語学校と他に三校（内二校は日系の学校）を招き、交流と日本の学校文化の発信を行ってきています。それに加えて、「授業における教授法」「子どもの意見を生かした授業の在り方」や、それに伴う「共通教材の開発」を、本プロジェクトで取り組んでいこう、ということになりました。そして、アスシオンの日系日本人会と最も関わりの深いアスシオン日本語学校（以下、「日本語学校」）を主な支援対象とすることにしました（日本語学校では日本語指導だけではなく、いくつかの教科についても授業を行っています）。

日本語学校への授業支援① — 本校での授業公開

七月に本校で、日本語学校との合同研修会が開かれました。本校の授業（国語・道徳・数学・英語）を日本語学校の教員に公開し、その後、分科会と全体会をもつ形で研修会を実施。授業には日本語学校の数名の児童も参加しました。

日本語学校の教員は、大型ディスプレイ



ディスプレイで教材を提示する国語の授業

プレーとパソコンを使っている教材提示の仕方に関心をもっていました。また、国語だけでなく英語の授業についても「日本語を教えるのと共通した部分があり、テンポの良い授業展開は参考になった」とのコメントが寄せられました。

全体会では、授業の進め方についてのアドバイスを本校が行いました。本時の流れの見通しを子どもにももたせる。

- ・教師がしゃべりすぎない。
- ・発問や指示をいろいろな言葉で言い換えない。
- ・正解を言うのが教師の仕事ではなく、子ども同士の発言をつなげることが大切。

手を挙げていない子にも指名をし

て、意見を聞いたり何に困っているかを尋ねたりすると良い。

授業を行う上での基本について、伝える機会となりました。

一方、日本語学校の教員は「日本語指導についての悩み」を多くもっていることが協議会でも明らかになりました。しかし本校の教員には日本語適応指導教室等で日本語指導を経験した者はいません。指導経験はなくても、日本の大学等が作成しているリライアント教材や指導法の紹介など、日本の関係機関との橋渡しになることが、今後の私たちの課題となることを感じました。

日本語学校への授業支援② — 日本語学校での授業参観・合同授業

日本語学校では、火・水・金曜日の昼からの平日コースと土曜日コースがあります。私たちは、八月の平日コースの授業を参観しました。土曜日よりも少人数で、「日本語能力が比較的高い」との説明がありました。

前回の本校での授業に刺激を受け、黒板にプロジェクトでスライドを映しながら授業をしている学級がありました。また、学年が異なる子どもたちに応じた課題に取り組む学級がありました。一方、子どもが黒板

に答えを書いている途中でも、間違いを指摘してしまう光景も見られました。授業後の意見交換の場では、「正答をどんどん言う子に授業が引っ張られている傾向がある。他の理解できていない子が考える余裕もなく次に進んでいる。それぞれの子に発言の機会を与え、つまづいている子を見逃さないようにすることが大切」との助言が出されました。

また、この参観をきっかけに、授業力の向上を図るには、日本人学校教員による出前授業ではなく、両校教員が一緒に授業を作り上げる経験をした方がいいのではないかと、私たちは考えました。

そこで十月のある水曜日に、本校職員が日本語学校に向き、日本語学校の教員と二人ペアで一つの授業を行うことにしました。授業作りの工夫や、その面白さを日本語学校の教員に知ってほしいとの願いを込めて。しかし、その事前打ち合わせは時間的にとても困難で、日本語学校の教員の一部からは合同授業ではなく、すべて日本人学校にお任せの出前授業を希望するような発言が聞かれることもありました。そこで、共通理解を深めるため電話やメールで授業展開について話し合い、当日の授業前にも最終打ち合わせをして、

国語の授業に臨みました。

小学三年生は「姿を変えたる大豆」の授業。画像をいくつも提示し、子どもたちの理解を深めていました。しかし、「煎る」「煮る」などの調理の用語は、「写真だけでは伝わりにくかった」との反省も出されました。小学四年生は「茶摘み」の歌詞を情景や色に注目しながら理解し、一緒に歌う授業。そして、ひらがなばかりの歌詞に、知っている漢字を書いて貼っていく活動を行いました。少人数でしたが、大きな声で歌い、たくさん漢字を見つけてくれた子どもたち。音楽を取り入れて楽しく授業展開したことが、学習意欲を高めたと考えられます。

授業後の協議会では、「授業の工夫により、子どもたちが集中して取り組んでいた」「使用した資料映像などを次年度以降も生かして改良していくと良い」などの声が聞かれました。一方、日本語学校の教員から、複数の学年の子どもたちに同時に授業を行うことへの悩みが出されました。派遣教員でも複式学級経験者は多くなく、これについては私たちも学んでいかなければならない課題となりました。

また「一つの授業をみんなで見合い、その後、研究協議会をもつ」という

日本でよく行われている「授業研究」の実施について、日本語学校に投げかけてみました。世界で認められつつある日本の学校文化の一つです。

しかし、「自習になれていないので、担任が教室を離れて授業見学するのは難しい」「限られた時間しかなく、その中でやるべきことがいっぱいあるので、その体制が取れない」と否定的な反応が多く聞かれました。今後、本校の授業を見に来てもらう際に、そのような授業研究会がもてないか、検討していきたいと思えます。

日本語学校への授業支援③
—日本語学校での習字・美術支援

日本語学校から、作品展に出品するので習字と美術の授業を支援してほしいという依頼が本校にありました。そこで十一月の土曜日に、二回にわたって本校の教員が指導の支援をしました。子どもたちは日本語学校の教員の指導により、かなりきれいな字が書いていました。今回は清書完成の支援でしたが、来年度は、筆の持ち方、姿勢、「はらい・はね・とめ」などの基本の指導に、最初から携われたら良いと、本校の教員は感じたいようです。次年度も支援を継続したいと思えます。

また、水墨画の指導も美術選択の



水墨画に挑戦する日本語学校生徒

生徒に行いました。「竹」を描く基本技術を学び、その後は簡単な水墨画のサンプルを見ながら、自分の作品を完成させました。墨の濃淡を使って表現することを生徒たちは楽しんでいました。

共通教材の開発

本校の子どもたちと日系の子どもたちにとって共通教材となり得るものの一つに、「移民」をテーマとした学習が挙げられます。現在、双方の子どもたちが移民について学べるように「移民すごろく」の制作を行っています。様々なクイズが用意されていて、それを通してパラグアイで移民について学べるようになっていきます。本年度、完成した際には、

パラグアイの各移住地にある日本語学校に贈りたいと思っています。

また来年度には、社会科副読本を改訂しようと計画しています。パラグアイやアスンシオンについて、副読本を通して日本人学校の子どもの日系の子どもたちも学べます。社会科としてだけでなく、日本語の読みものとしても使えるような内容にする予定です。

おわりに

このプロジェクトを通して、様々な場で、日本人学校が現地の地域社会から頼られる存在になりつつあることを感じています。日本に帰国する子どもたちだけでなく、この地で生きていく日系の子どもたちに貢献できることは、私たちとしてもたいへん誇らしいことです。このような機会を与えていただきましたことを、深く感謝申し上げます。

本校には派遣教員が六名いますが、本年度四月に五名が入れ替わり、日々の学校活動を充実させていくだけでも精一杯なところがありました。このプロジェクトを当初から支援してくださっている当地に詳しい平岩コーディネーターの存在は非常にありがたいものです。平岩様にもこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

エー A ジー G5 ファイブ だよ

日本人学校・
補習授業校を
応援します！

補習授業校高等部の可能性

AG5 補習授業校チーム・海外子女教育振興財団 教育相談員 佐々 信行
ダラス補習授業校 講師 前田 耕



佐々 信行



前田 耕

アメリカで日本人の高校生が補習授業校に通う割合はそれほど高くありません。母語の確立のために日本語の環境がどうしても必要という年齢ではないし、ハイスクールの学習やスポーツその他の活動に多くの時間を使いたいのも分かりますから、やむを得ないとも言えるでしょう。しかし、補習授業校に通うことを選択した生徒たちは、自分なりに充実した学習を展開しています。補習授業校の高等部にはグローバル人材を育成する場として大きな可能性があります。

高等部はおもしろい

佐々 信行

◆高等部の科目設定

高校の「国語」の教科は多数の科目に分かれています。補習授業校でも「国語」「国語総合」「現代文」などいろいろな名前で授業が行われていますが、内容や進め方はそれぞれの学校の実情に応じて工夫されています。高校生は特に、卒業後の進学が大きなテーマになります。帰国生入試で日本の大学を目指す生徒たちを意識して、多くの補習授業校では「小論文」の授業を行っています。帰国する生徒が多い学校では数学などの理系の科目も設定して生徒のニーズに応えようとしています。中には英語の授業を実施しているところもあります。補習授業校が英語の授業を行うというのは意外な感じがしますが、日本人の先生に指導してもらったことで、日本人として英語を使いこなす力がつき、大学入試でも力を発揮できると考えれば納得がいきます。アメリカでは補習授業校の国語の授業を「AP Japanese」としてハイスクールの単位に認めてもらっている事例もあります。一般のアメリカ人の生徒に比べると当然日本語の力は

優れているわけですから、それを成績に含めてもらえれば都合ということになります。

◆高校卒業後の進路

補習授業校の高等部に通うのは帰国を前提とする生徒たちだけではありません。帰国の予定が当面なくてもこれまで苦労して学んだ日本語の力をさらに伸ばし、日本語の力をアメリカで強みとして生かしていきたいという生徒たちもいます。中にはアメリカで生まれ育った生徒が留学生のような立場で日本の大学で学びたいと考えているケースもあります。

日本の大学を目指す生徒とアメリカの大学に進もうとする生徒の割合は、補習授業校によって大きく違います。AG5プロジェクトで行った調査によれば、ある学校では日本の大学志望者が大多数ですが、アメリカの大学志望者が圧倒的に多いところもある。日本の大学志望者の方々がわずかに上回るという状況の学校もあります。

◆得意な言語がちがっても

高校生の人数が多く、また先生も確保できれば、進路別にクラスを分けることも可能ですが、そのようなケースはむしろ特別です。普通は、

進学先の希望も日本語の力も異なる生徒たちが一つの教室で学ぶこととなります。ただ、「グローバル人材の育成」という視点で見ると、それが必ずしも不幸なこととは言えません。高校生ですから、日本語の方が得意な生徒と英語の方が得意な生徒が一つのテーマについて共に考え、英語の方が得意であればまず英語で意見をまとめ、それを日本語で発表できるように準備して授業に臨むことができます。これは、多くの日本人の生徒が現地の校の授業の準備をするのと同じことです。一方、日本語が得意な生徒は、誤解を受けないよう分かりやすい日本語の表現を工夫する等、主張を理解してもらうよう努力することが求められます。どちらも、コミュニケーションの技能を高めることにつながります。補習授業校を「グローバル人材」を育てる場として考えるなら、高等部の可能性にも当然注目するべきでしょう。

◆「グローバル」の授業

ダラス補習授業校の高等部には「メディア時事」という科目があります。いわば「グローバル人材」としての力を育てることを科目名にしているユニークな授業です。参観さ

せていただいたことがあります、いわゆる「帰国組」の生徒も「永住組」の生徒も意欲的に発言し、活発な討論が行われていました。一人ひとりが他人とはちがった自分なりの考えを示しているという姿勢が見られ、アメリカのハイスクールで鍛えられた力が発揮されているという感じを受けました。タイムリーな問題について考える学習であるということから、大学入試の際の小論文や面接に備えるという面でも、逆にアメリカの学校で日本人の視点を理解しながら考えを深めていくという面でも、得るところの多い授業だと思います。このような授業が補習授業校の高等部で展開されているのはうれしいことです。

◆補習授業校を結んで

とは言え、単独の補習授業校で高等部の授業を整備していくのは大変です。補習授業校の先生を見つければどの学年でも容易ではないのですが、高校となると各科目の専門的な知識が要求されるので、さらに難しくなります。小さな補習授業校では、そもそも高校生的人数が少なく、クラスとして成立させることも危うくなります。

もし、いくつもの補習授業校が高

等部の充実のために力を合わせることでできれば、今までできなかったことが可能になるかもしれません。幸いなことに、技術の進歩によつて、離れた所にながらコミュニケーションを図ることはずいぶん容易になりました。ダラス補習授業校ではシンシナティ補習授業校の協力を得て、両校の高等部の教室を結ぶ交流授業が実現しました。「高校野球の試合において、投手の連投を制限すべきか」という高校生が自分の問題として考えられるテーマでの討論では、自分自身や友だちの経験をふまえてしっかりと意見を発表が相次ぎました。いくらかの緊張感もあるなか、具体的なデータを準備して当日に臨むなど生徒たちには意欲的な姿勢が見られました。両校の接続に関して若干の技術的な問題はありましたが、保護者や借用校の学校区を含め各方面から応援をいただいてまずまずの状態で行うことができました。

その後、両校の生徒がこのテーマで小論文を書きましたが、交流授業では活発に発言できなかつた生徒も、討論の内容をふまえて自分の意見を展開していました。

これからの補習授業校間の協力に向けて一歩前進できたいと思います。

ダラス補習授業校高等部の授業

前田 耕

私はダラス補習授業校(以下「ダラス」)で四年前から「メディア時事」という高校生向けの授業を担当しています。これは高校二・三年生を対象とした選択科目で、日本のニュースに多く触れることと、口頭での発表と討論の能力を伸ばすことを主目的にしています。ここでは、私の授業の紹介と、二〇一八年十月に行われたシンシナティ補習授業校(以下「シンシナティ」)との交流授業の様子をレポートします。

◆「メディア時事」の進め方

通常は、二週間(四校時)を使って、一つのテーマを扱います。テーマの選択は私が行います。原発再稼働、夫婦別姓、働き方改革、死刑廃止、TPP加入、沖縄基地移転問題、新安保法制、外国人労働者受け入れ、など様々なテーマを取り上げてきました。なるべく時宜になつた話題を扱うように心がけ、沖縄県知事選挙が行われている間には基地移転問題について、また日本のバラエティ番組での演出が黒人差別だとして

問題になったときはその件を取り上げたりしました。

テーマについての記事や論説が選んで授業に用います。その際、賛成・反対の両側からの意見がバランスよく混ざるように気をつけています。授業では、それらの記事を全員で読み、問題の背景や難しい言葉の意味などについての解説を挟みつつ、ときどき生徒にどう思うか問いかけます。誰かが意見を述べたら、それへの反論がないか尋ね、徐々に生徒間の議論に移行させます。そして、意見がある程度出たら次の記事を読んで再び考えるところという方式で授業を進めていきます。自由に議論してもらうために私は個人的な意見は一切言いませんし、常に中立であるということや年度初めにはつきり宣言しています。議論を深めるために、「〜という反論をされたらどう答える?」といった問いかけはしますが、それが個人の意見と同じとは限らないことを生徒達は理解しています。二週間の最後には、賛成と反対の二チームに分かれて座り、ミニ討論会を行います。どちらの側に入るかは、生徒一人一人に自分で決めさせます。これについては、競技ディベートで行われているような、クジ引きで両派を分けるというやり方も可

能でしょうし、その方がいいだろうという意見もあるでしょう。しかし私としては、自分はどうだろうと真剣に考えて欲しいので、このやり方を取っています。ただし、二チームに分けた際に人数が極端に偏ってしまったら、「自分の意見と逆の立場から主張する練習をしてみよう」と言って、一部の生徒を逆の陣営に移らせたりすることはあります。

チーム分けをしたあとは、討論開始までに十五分から二十分ほどの時間を与えて打ち合わせをさせます。慣れてくると、この時間内に生徒達の間で活発な意見の交換が行われるようになります。準備が終わったら、両派から二人ずつの代表に出てもらい、順に主張と反論を行わせます。勝敗はつけませんが、私から最後にコメントとアドバイスをします。

生徒の人数は、日によって安定しませんが、八人から十五人ほどです。少ないと意見が活発に出ないし、逆に多過ぎると座っているだけの生徒が出てしまいます。この先、十五人を超えるようになったら、他の方法を考える必要があるかもしれません。

◆交流授業の試み

二〇一八年十月にAG5プロジェクトから支援を頂き、シンシナティ

との「交流授業」を行いました。二週連続で土曜日に両校の教室をビデオ通話で繋ぎました。一時間の時差があるため、シンシナティの六校時目とダラスの五校時目を使い、各回六十分ずつ行いました。

一二〇分という比較的短い時間で行うため、多くの説明を要するテーマは避けることにしました。選んだのは「高校野球の試合において、投手の連投を制限すべきか」です。二〇一八年夏の甲子園大会で準優勝したチームの投手が「投げ過ぎ」だったというニュースが話題になり、連投に規制を設けるべきかという議論がメディアで展開されていました。また、同じ高校生ということで生徒達には身近に感じられる話題だろう



シンシナティ補習授業校との交流授業

とも考えました。このテーマから日本社会に見られる「働き過ぎ」や「集団内での無言の圧力」、さらには「ブラック企業」などの問題にも言及していこうと計画して準備しました。

通信に使う機器の準備と設定などについては、補習授業校の教職員や運営委員にお世話になり、大変感謝しています。一回目の授業の冒頭では、両校の生徒一人一人に短い自己紹介をしてもらうことから始め、記事を読み始めました。生徒達は期待通り、スポーツの活動経験などに絡めた発言をしてくれました。日米でのスポーツ文化の違いを感じたことがあるかと問いかけると、そこから面白い議論が生まれました。

二回目は生徒同士の議論を中心に行いたかったのですが、完全に自由になると、うまくまとまらなかったり、時間よりも早く話が尽きたりしてしまう心配があったので、両校から二人ずつ、議論の柱になる生徒を出してもらいました。その四人には、一回目と二回目の一週間に短いスピーチの準備をしてもらいました。二人には連投制限を設けることに賛成の主張、あとの二人には反対の主張の準備をするよう頼みました。

二回目は、まず準備してきた四人に主張を述べてもらうことから始め、

生徒同士のディスカッションに進みました。途中、関連した話題として、その少し前に福岡で行われた全日本実業団女子駅伝で怪我をした選手が四つんばいでタスキを繋いだ件を紹介して写真を見せました。チームへの責任感から無理をしてしまうという点で高校野球の投げ過ぎと関連するのではないかという問いかけを行ったのですが、大いに盛り上がり、まだはいきませんでした。

生徒達は二回目になるとある程度の親近感を互いに感じていたように見えましたが、最後は互いに手を振りながら、交流授業を終了しました。ダラスの生徒たちに訊いたところ、

「普段とは違うメンバーと話し合うのは新鮮だった」との感想が寄せられました。確かに、毎週同じメンバーでやっているのと、「誰々はいつも右(左)寄りだ」など互いのことがよく分かってきます。全く知らない人とのやり取りは新鮮だったことでしょう。両校の生徒達がいい刺激を感じてくれたらとても嬉しいです。

今回の交流授業は、私にも楽しく貴重な経験になりました。今後、似たような試みを行う機会があるかどうかは分かりませんが、少なくともダラスでの今後の授業作りに今回の経験を生かしていきたいと思えます。

〒105-0002

東京都港区愛宕1-3-4 愛宕東洋ビル6階

公益財団法人 海外子女教育振興財団

事業部 教育企画・教育相談チーム

TEL : 03-4330-1352

FAX : 03-4330-1355

E-mail : ag5@joes.or.jp

URL : <https://www.joes.or.jp>

